

孟津抄「若菜 上」 一冊 (一)

野村 精一  
平井 仁子

凡例

- 一、本学黒川文庫蔵『孟津抄』の若菜上巻の一部（総丁数一三七丁のうち九四丁まで）を翻刻する。（残余は、解説と共に年報次号に掲載の予定）
- 二、字配り・改行等は、底本のままとし、行末の左脇に別行で書かれた文末詞の類は左側行間に小活字で示した。
- 三、底本の誤りと認められるものもそのまま翻刻したが、傍に（マ、）と示した。但し立項された源氏物語の本文については除いた。
- 四、一部の異体字、略字は、底本のまま存した。例えば、「手」（「私」）、「ゝ——」（和歌などの下句の省略符号）などである。なお濁点は忠実に残すことを旨とした。

若菜上

此物語を上下にわかつ事此卷はかり也後漢書

列傳第廿卷上下其外委之和語例日本紀第一

第二神代上下 河花ニクハはし賀の事を本にか

けり源氏卅九より四十一歳までの事あり

卷名源四十賀を玉かつらのし給しわかなまいりし

事也

小松原すゑのよはひにひかれてや野へのわかなも千代を摘きへ

朱雀院のみかとありしみゆきのうち

藤裏葉に六条院に行幸ありし事也

あつしくおはします 靈運當遷伊弉册尊桐壺

卷ニ注也

年ころおこなひのほいふかきを 御出家事也

此たひは物心ほそく とは平生御不豫かちなる程にと云

義也

きさいの宮 弘徽殿崩御事こゝにはしめて書出也

そのかたにもよほすにやあらん 後生かたの事也

みこたちは春宮をき奉りて女宮たちなむ

四ところおはしましける

女一宮 落葉宮 女三宮 四宮是也

藤つほとときえしは先帝の源氏にそおはしましける

源氏宮薄雲妹也朱雀院春宮の時よりまいり

給て女三をうみ給藤壺と聞えきうせ給よし

わかな上にみゆ弘徽殿女御の朧月夜を立后

にと思給はとに此藤つほの覚えなくなる也

先帝とた文字を濁也 朱の御代に終立后なし

延喜御時承香殿女御正三位源和子は光孝天皇

の源也此女御の御腹に慶子詔子齊子内親王

三人ありいま女三宮はこれに准るにや

たかきくらゐにも 立后なくて過し事也

ないしのかみをまいらせ奉り給て 朧を弘徽殿執立

申さんと也

みかとも御心の中に 朱の御心には藤壺をいかゝと

おほしめせとも

物よはうましませはきと不被仰出問(ウ)にうせ給也

おりさせ給にしかは 朱の脱履は儘(ウ)の巻にあり

その御はらの女三宮 此宮をいひ出へきとて書也

誰をたのむかけにて物し給はんとすらんと 女三を

朱のおほしなけく也

わひ人のわきて立よる木のもととはたのむかけなく紅葉けりちり

女三の事を朱のおほしなけく也

にし山なる御寺つくりいてゝ 花鳥にくはし

たゝこの御かたにと 女三へ重寶はまいらせらるゝ也

そのつきくをこみこたちには御そふんともあり

ける

宇多御門をは御出家の後朱雀院と申侍り

承平四年に朱雀院御處分事あり

李部王記にみえたり

春宮はかゝる御なやみに 今上の見舞被申也

女御もとひきこえ 承香殿女御今上の母也

うせ給へるよしわかな下にみえたり髻黒妹也

宮にもよろつの事世をたち給はん心つかひ

など 朱の東宮へしめし申さるゝ也

御としの程よりはいとよくおとなひさせ給て御う

しろみともゝ

東宮のおとなしくおはすうしろみは女御達也

この世にうらみのこること侍らす 朱御詞也

さらぬわかれにもはたしなりぬへかりける

老ぬれはさらぬ別のゝ――

女は心より外に 男はくるしからす女は一大事と也

いつれをもおもふやうならむ 朱の東宮への御をしへ也

そのなかにうしろみなとあるはそのかたに思ゆへり

みな御親類ともつよき也此女三はたよりすくなきと也

たゝひとりをたのもしき物と 朱はかりを女三の

御たのみ有ほとにとの事也

女御にも心うつくしきさまに聞えつけさせ給切されと

継母とて隔給はてはこくみて給はれと也花鳥

には心うつくしたのむかたなきさまをの給

也云々相違也

されとはゝ女御の人よりまさりて これより

をしはからるゝかしと云まで草子地色く

紫式部か心を書也

えうるはしからざるらし 皆心の隔くたると也

あさゆふにこの御ことをおほしなげきて

朱御心女三事也

御位はさらせ給へれと 御在位の間は心安事

に思て皆なつき申也

たのみそめたてまつり給へる人々は 奉公

申たりし人也

院はよろこひきこえさせ給へ 六条院の御

参有へきよしを朱の悦給也

中納言君 夕霧也

古院のうへのいまはのきさまにあまたの御ゆい

こんありしなかにこの院の御事いまのうち

の事なん

桐つほの御門御事也榊巻にあり此院とは

源事也

いまのうちの御事とは冷泉院事也 朱御詞也

うちくゝの心よせはかはらす 内々の御心也

はかなき事のあやまりに 朧の事に須磨への事也

そのうらみ残し給へるけしきをなん 朱御詞源

のうらみあるへきを露ほとも我にその色を

みえ給ひはせぬと也

さかしき人といへと身のうへになりぬれはことたかひて

心うこきかならずそのむくひみえゆかめること

(4才)

(4ウ)

(3ウ)

(5才)

なんいにしへたにおほかりける

以恨報惡事不可勝計

天台尺云 以恩報於惡者以油如滅火云々

つゐにしのひすくさせ給ひて春宮などにも心よ聞え給

今上へ明石の姫君をまいらせ給程に恨をの

給はぬと也

いまはたまたなくしたしかるへき中となり

明姫の東宮の女御になり給ふ事

このみちのやみにたちましり 朱の御心也

人のおやの心は、――

かくすゑの世のあきらけき君として

冷を天曆御門になすらへ奉也

この秋の行幸の後 十月を秌といへる紅葉を

賞する故也又一年を春秌といふは夏は春に

とり冬をは秋にとる故也

拾遺部分ニ雜の春に夏を属す此義あり

行幸は十月也然を秌と書り尤詞優也

たいめんにきゆへきことゝも侍りかならずみつ

からとふらひものし給へきよしもほし申

給へなと

朱の夕霧に源への御返答也

中納言の君すき侍にけん 夕詞過し事はと也

大小のことにつけても 夕の朱へ被申詞也

(5ウ)

としまかりいり侍て 夕詞年寄てと云心歟

かくおほやけの御うしろみを 源心を夕詞也

故院の御ゆいこんのこと 如也 桐壺御門御事也

源に大やけに仕へき事を仰ありしと也

御くらゐにおはしましゝ世には 源のいまた年

ゆかぬ程にと也

かしこきかみの人々おほくて 源よりも上の人也

いまかくまつりことをさりてしつかにおはします

ころほひ心のうちをもへたてなくまいり

朱の事を源のゝ給ふかくてましますに参て

申度との給ふと夕の被申入詞也心の中

をもとは御うしろみの事はなきと也

所せき身のよそほひにて 源の蒙院号事也

はたちにもわつかなる程なれと 夕霧廿に

ならんとてのまへの年の十二月の事也

源卅九歳 夕十九才也

うちまもらせ給つゝ 夕を朱のまもらせ給也

ひめ宮の御うしろみにこれをやなと人しれす

おほしよりけり

朱の御心に女三宮を夕へとおほしよる也

おほきおとゝのわたりにいまはすみつかれにたり

これより朱の御詞也雲の鷹事也

さすかにねたく思ふ事こそあれ 朱御心女三

をと思召也

(7オ)

(6ウ)

(7ウ)



たゞはか／＼しくも侍らぬ身にはよるへもさふ  
らひかたくのみ

我は落つきたる事もなきと夕詞也

女房などはそのきてみきこえて 夕をのそ

あなめてたなとあつまりてきこゆ 夕をのそ<sub>く也</sub>

く衆のいふ也

かの院のかはかりにおはせし御ありさまには  
えなすらへ

源の夕のとし比のやうにはなすらへ給はしといふ<sub>也</sub>

いひしろふをきこしめてまことにかれは

朱のきこしめてかれはとは源の事也

源は別段事也今は又その世にもねひまさ

りてひかるとはこれを云にやと源事を被仰<sub>也</sub>

なに事もさきの世をしはかられて 源の先<sub>也</sub>

世しられたると也

宮のうちにおひいてゝ帝王のかきりなく

朱の御詞源を桐壺の御鐘愛にてそたて

給と也

心のまゝにおこらすひけして 源の本性不

奢不慢也

廿かうちには納言にもならすなりにきかしひ

とつあまりてや宰相にて大将かけ給へりけん

二十<sub>ニシツ</sub>かうちには或本ハタチト書たり

六条院紅葉賀卷任参議廿<sub>ニシツ</sub>秋葵卷兼大将 廿一<sub>ニシツ</sub>貞信公昌泰三三  
任参議廿一<sub>ニシツ</sub>

(8オ)

それにこれはいとこよなくすゝみにためるは

夕十九才にて中納言に任せらるゝ事をいへり

つき／＼のこのおほえまさるなめり 次々子也

おさ／＼おとるましく 源にも夕はおとらしと朱御<sub>詞也</sub>

ひめ宮のいとうつくしけにて 女三也

かつは又かたほひならむ事をは 且者と也可然うし<sub>ろみ</sub>

をそへたきと也

式部卿のみこのむすめ 紫を源のあつかふやうに

女三をする人あれかしとの心也

内には中宮 秋好也

この権中納言の朝臣 夕霧也

中納言はもとよりいとまめ人にてとし比もかの

わたりに心をかけてほかさまに思ひうつろふへく<sub>も</sub>

侍らざりけるにその思ひかなひても

別心なきと夕事を女房たちの詞也雲

ゐに心をかけし時もうつろふかたなく侍し<sub>(ニシツ)</sub>

ねかひかなひても禰ゆるく方なしと也

かの院こそ 源事を女房達の申詞也

やむことなき御ねかひ 紫も本臺の御位には

十分ならずと也

前斎院など 権宮をも今によくし給程に

源へ女三をとめのと詞也

いてそのふりせぬあたけ これより朱御詞也

あたけはあたるけ也

(9ウ)

(9オ)

おやさまに 親のやうにする人もかなと也

すこしもよつきてあらせむと思はむ女こもたら

はかの人のあたりにこそふれはらせまほしけれ

源にと也河なうつほの物語の事を被引たり

われ女ならはおなしはらからなりとも 朱御詞也

源をゝきては誰に心をうつさんそと也

女のあさむくは 欺庭也女は男にたふらかさるゝ

かむの君の御事もおほしいてらるへし

草子地ニチャクト書也

この御うしろみとものなかにおもゝしき御めの

とのせうと左中弁なるかの院のしたしき人にて

女三宮の御めのとのせうとの左中弁也

源へしたしき也花鳥には六条院の院司かね

たるといふにやと云々

うへなむしかゝ御けしきありて 左中弁に

めのとのかやうに朱の思召と云也

うへをゝき奉りて又ま心に 朱を置て又真実

の心に入申人はあらしとめのと左中弁に

對しての詞也

をのれはつかうまつるとてもなにはかりの宮つかへに

めのとの詞也

かしこぎすちときこゆれと女はいとすくせ

さためかたく

貴人といへとも女の宿世は定かたきなれば大

事と也

(10オ)

ちりもすへ奉らしと 床夏の哥詞也ちり

はかりも人にあしく思はせ奉らしの心也

又けかさねぬ心也

弁いかなるへき御事にかあらむ院はあやしきまで

弁詞源事也

やむことなきおほしたる後 紫上事也あまた

つとへ聞給へれとゝは源の御心の廣大なる程

と弁詞也

それにことよりてかひなけなるすまひし給

かたゝこそ 紫上の威芳におされてと云義也

たちならひてをしたち給ことはあらしとこそは

女三の源と御すくせありてましますとも

紫のやうにしてはましますと也をしたち

給事は壓也弁詞也

猶いかゝとはゝからるゝことありてなんおほゆる

弁詞也さまゝいひて又猶しりかたきと

思案したる也面白語也

さるはこの世のさかはすゑの世にすきてみに

心もとなきことは

此世のさかとは悪事はおほえぬを女事に

つきては人のもときをゝひ侍ると源のつねゝ

被仰と弁詞也弄源心也ほたいなとのなき

事也云々

(11ウ)

(10ウ)

(11オ)

(12オ)

うち／＼のすさひことにも 源はあまた思人はあれと定たるはなきと云事也

たちくたれるきにはものし給はねとかきりあるた<sup>つこ</sup>人ともにて院の御ありさまにならふへきおほえくしたるやおはするそれにおなしはけにさもおはしまさはいかにたくひたる御あはひならむとかたらふを 下臈の際にはあらねと

源の御位にひとしく具したるやおはするさ様におほしめさは源の御ためにはたくひたる御間ならむと也

めのと又ことのつめてに 朱へ被申也しか／＼ならむ云々 日本紀めのとの申詞也ほと／＼につけて 源心をいふ也

たゝ人たに 平人さへ思人数多ある所へやかたきにと也

いまの世のやうとはみなほからかに

当世はみなかしこくて世を我とすくし給を

此女三宮はさやうにも有ましきとめのとの花鳥ほからかは万事に同達したる心也末の世に

はいかなる上臈なりともよろつに心うるかたなくては人にあさむかるゝ事の有へきをいふ也弄同説也

さかしきしも人も 上かしかとあれば下もたのもしき物なるを女三は無調法にまします程にとめのとの申也

(12ウ)

しか思ひたるとるによりなん これより朱の御詞也みこたちのよつきたるありさま 人をさためて持たるはわろけれとも又さやうになくてもと

朱の被仰也

弄

みこたちのわたくしの男まうけ給はほめぬ事次の詞に又たかききはいへるもおなし女の男にみゆるにつけて大事なる事をならへていへる也 花鳥説同し

女はおとこに見ゆるにつけてこそ 女は男に名の立か一大事も別事はゆるさるゝ也貞女不看兩夫心をたてゝ世中にすくさむ事も昔は人の心たひらかに

(13オ)

朱のめのとに對しての御詞也心をたてゝとは定心なりとの義也昔は堅固に定心なる人には思絶て心をかけぬ也

いまの世にはすき／＼しく 昔は尼になれば思ひたえぬれとも今は又いかやうの事もあると也なきおやのおもてをふせかけをはつかしむる

かさせとも老もかくれぬこの春そ花のおもてもふせつへらなる

(14ウ)

女は心よりおやまで恥をあたふ物也いひもてゆけはみなおなしこと也 花みこたちのわたくしのうしろみもち給へると又おやの家にあかめられし人のむすめのなを／＼しきすき物に名をたちなきおやのおもてふせになるとはい

(13ウ)

(14オ)

ひもてゆけは同じわさになる心也たかきもく  
たれるも同事也

程／＼につけてすくせなといふなることは

宿世といふ事はそれ／＼にしられぬ事也

ありへてもこよなきさいはいあり これは下に  
おやにしらせするへき人もゆるさぬをわか  
心つからしのひわたしたる女の事也ありへて  
はこよなきさいはいありめやすき事になる

こともあれとそのはしめふとき／＼つけたる時  
は心つきなくおほゆると也

心つからしのひわさしいてたるなん女の身には  
ますことなききすとおほゆるわさなる 河に

孟子の語アリ

たゝ人のなからひにてたに よのつねの人のうへ  
にてたにあはつてく覚るにまして上々の

事はいふに及はぬ事也

みつからの心よりはなれてあるへきにもあらぬを

三界唯一心と外無別法のことはりなれは

よきもあしきも心をはなれてあるへきに

あらざる也

身のもてなしありさまをしはかるゝことなるを

これよりめのとに能々まもれとの朱の被仰詞也

あやしく物はかなき心さまにやとみゆる

女三御心のやうを朱の被仰也 花鳥説あり

(15才)

いよ／＼わつらはしく思あへり花院のゝ給事を

聞てめのとたちはいよ／＼わつらはしき事に思

今すこし物をも思ひしり給程まで 源の事也 あへり

朱の御詞也

ふかきほいもとけすなりぬへき心ちするに

朱の御出家の御心ふかし

かの六条のおとゝは 源にとおほす朱御心也

よろしかるへき人たれかはあらむ 源の外には

誰かあらむと也

兵部卿宮 蟹也 なよひかに 清てよむへし

又大納言の朝臣の家つかさのそむ

家司系図ニなし 花ニくはし  
弄ニモアリ

かしこきことに思ひさためんはいとあかすくちおし かるへき

大納言にもとの事也昔もかやうの事は

ありし事也かしこきかたに思さためんは

とはかしつき奉るとも弁当にても人から

のおほえ無道ならんと也

右衛門督のしたにわふなるよし内侍のかみ物せら れし

柏木也臘月夜のおい也 帝王女退遮人事

河くはし 庶敷

いますこし物めかしき程になりなは 柏事を

朱御詞也

このためにとおもひはてんにはかきりそあるやと

柏へとはおほしめしきためぬ也

(16ウ)

(17才)

あね君たちをはかけてもきこえなやまし給人もなし  
女三の御はらから達あまたおほしけれとも

申人はなし只女三を一段朱の御愛子たる

ゆへなり

あやしくうち／＼にの給はする御さゝめきことゝも

源事を朱詞也

おほきおとゝもこの衛門のかみ 致仕のおとゝ

の柏を数に入らるゝ程にあはれ預給へかし

かんの君して被申也

かのあね北の方して 二条太政大臣の四の君柏

などの母臘月の姉也

兵部卿の宮は左大将の北のかたをきこえはつし給て

螢宮は玉かつらを取はつしたる程にと満足せぬ

事也

かたほならむことはとえりすくし給に

此女三をと螢のおほしめす心也花かたはなる

はわろき事也人の思ふ所かたはならむ事

ならんと思給ふ也

藤大納言 前に家司望し人也 朱の別当也

この宮の御うしろみ 女三をあつかり申へきと也

権中納言も 夕霧の女三をあつかり申へき

申たらはもてはなれては仰られしと思ひ

給也只今あれにこれにとあれは朱の御直

御気色もありしと也

(18才)

女君のいまはとうちとけてたのみ聞え給へるを

雲ゐのはや打とけ給にいとおしくと夕

霧の実法なる心にて思惟也

とし比つらきにも 年来一すちに思ひし

今更物思ひをさせ申てはと夕の鴈を

大切に思給也

にはかに物をやおもはせきこえん

かねてつらさをわれにならばさてにはかに物を思はする

なのめならずやむことなきかたにかゝつらひなは

女三にひとつになりたれば大かたにはあひしらひ

申さし然者雲ゐのかたにも心をかれん時

は心くるしからむと也

すぎ／＼しからぬ心なれは思しつめつゝうちいて

ねとさすかにほかさまにさたまり給はんも

夕霧はあなたこなたと心のよらぬ人なり

されとも女三のよそへ御出あらは又いかゝと

思はんとも也

春宮にもかゝる事ともきこしめして

女三を源へ被申定事を東宮のゝ給ふ也

さしあたりたるたゝいまのことよりものちの

ためしとも 東宮より仰詞也

これは後代の例にも成へきに人からよし

とてもたゝ人には不可然と也

なをしかおほしたつことならはかの六条院にこそ

(19ウ)

(17ウ)

(18ウ)

(19才)

皇女を給ふ事は漢家本朝通例なり

なをと尚也

いとよくおほしの給はせたり 朱詞也東宮の  
能被仰と也

この宮の御事かくおほしわつらふ 女三事也  
院の御世のゝこり 朱の御事也我も同程の

齡なれはと源詞也

宋四十二  
源卅九

けにしたいをあやまたぬ 生老の次第をいはゝ  
一兩年もわかきと源詞也

いつれのみこたちをも 源詞也いつれも疎  
略申ましき也わきて一段の御鐘愛なれ

は別而あつかひて申と也

いとふちやうなる世のさためなさなりや

兄よりも弟か先立事もある世なれはと  
の事也此詞面白不定世界の義也重詞也

中納言などは 夕霧には似合たると也

思ふ人さたまりにてそあめれは これは鷹のさ  
たまりたると也

弁はおほろけの御さためにもあらぬを

大かたにも御さためなきにと弁か源へ申也  
源を頼まいらせらるへきと朱のおほしめす

と弁詞也

さすかにうち多みつゝ 源の領掌の心ちと出来也  
あなかに 女三は一段と朱の御愛子と源詞也

(20オ)

たゝうちにこそ奉り給はめ 源詞也

やむことなきまへの人に 先也さきたちておはし  
ます女御事也

すゑの人をろかなるやもなし 末に参たる人も  
叡心に叶のみなりと也

故院の御時におはきさきの坊のはしめの女御  
にていきまき給しかと

寢にて先例をひかれて薄雲におされ給  
と

桐壺御門の證拠を取出て源のゝ給也いき  
まきは威勢の事也

河にいかれる姿と云々同心也

このみこの御はゝ女御こそは 女三御母女御は  
薄雲妹也

としもくれぬ 源卅九歳の臘月

朱雀院には御心地猶をこたりさまにも

御悩の事也河ニくはし

御裳きの事 昌子内親王の御はかまきの

例を思へりと花ニアリ

かへ殿のにしおもてに 栢にてつくる也かえと

よむへし河ニくはし

もろこしのきさきのかさりをおほしやりて

河花ニくはし

河嵯峨天皇弘仁八年男女衣服用唐法

御こしゆひにはおほきおとゝをかねてより

(21オ)

(21ウ)

致仕はやうかましき人なれと参給也

花 康子内親王御裳ぎの腰ゆひを一条左大臣の  
例也河ニくはし

(22オ)

いまふた所の大匠 左右大臣也

院の御事このたひこそとちめなれと

朱の御大宮これに過たるはなしと也

おさめ殿のから物 藏人所納殿共納御物處也

朱のかやうの事は稀なる程にとて種々の物を  
まいらせらるゝ也

弄

問云女三宮御もぎの時内春宮の御心よせの  
事也藏人所も物ををかるゝ所にや地下  
の者の候所云々如何

(22ウ)

一勘答藏人所は今の世にも藏人方とて調  
進物なと事によりてあり

尊者の大匠 其日の賞翫也著裳の腰ゆひを

尊者と号す可勘これは大饗の例をもて御

裳ぎのこしゆひを尊者といへり おはよそ

唐朝には徳爵齒の三の中に一もあれば尊者  
といへる也

者

者

中宮よりも御さうそくくしのはこ心ことにかの昔の

みくしあけの具ゆへあるさまにあらためてくはへて

さすかにもとの心はへうしなはず

花 秋好より昔のを其まゝ又新調しそへられたる也  
御裳ぎにはまつ髪上の儀式あれば櫛の筥も

(23オ)

いる事也

問秋好中宮より朱雀院の女三宮へ参らせ

らるゝ也昔のみくしあけの具とは古物にや如何

一勘秋好中宮の齋宮に立給ふ時用られし

みくしあけの具なるへし

宮の権のすけ 中宮権亮也姫宮の御方へ

此哥を権亮してまいらせんとおほしめせとも

朱へまいらせられたる也

(23ウ)

かゝることそ中にありける 朱へ御哥事也

さしなからむかしをいまにつたふれば玉のくしそ神さひにける

秋好御哥也さしなからはさなから也くしによせ

たり神さひにけるは久しき也卑下の心あり

花 さしなからの五文字二の心あり櫛をはひたい

にさす物なればさしなからとよみ給へり

後拾 そなはれし玉の櫛をさしなから又から衣結びしひもは

さしなからこれはさすといふ心也又さなからと

詞にも用る也

拾 おほ空にむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなる

(24オ)

さしなから人の心をみくまのゝ浦のはまゆふいくへなるらん

これはさなからといふ詞に叶へりこのさしなから

河 昔を今につたふればの哥は二の心に通せる也

齋宮にてくたりし給し時えならぬ御よ

そひとも御くしのはこなとありし事也

あえ物 あやかり物といふ心也 秋好にあやかり給へ

御かへりも昔のあはれをはさしをきて 花齋御下の<sup>と</sup>

時朱の御身にしみておほしめされし事を

哀をさしをきてとかけると

さしつぎにみるものにもかよろつ世をつけのをくしの神さふる<sup>まで</sup>

(24ウ)

朱御返哥也中宮のさしつぎに女三のさいはい

おはせと也みる物にもかとは哉也神さふる<sup>と</sup>まで

は行末を千焔万歳と祝給也

あしのやのなたの塩焼いとまなみつけのをくしもさ<sup>きにけり</sup>ます

御心いとくるしきを 朱也

三日すくしてつゐに御くしおろし給

御裳き過て三日也

内侍のかんの君 臘月夜つとさふらひ給て集<sup>日本紀</sup>

おほしりたるをこしらへかねて 臘のかなしみ給ふ

を朱の御意見もありかねたる也

こをおもふみちはかきりありけり 父の子を思は

限あれとも夫婦の中はふかきと也

あなかちに 強の字をあなからちとよむ也

山のさすよりはしめて御いむことのあさり三人

さふらひてほうふく<sup>な</sup>と奉る程

受戒ニ羯磨阿闍梨 教授阿闍梨とてある歟

朱<sup>金</sup> 太上天皇落飾の事河<sup>く</sup>はし

ゆすりみちて 動 たゝこのおさなき宮にひか

され 女三也

六条院も 源

御たうはりのみふなとこそみなおなしことおり<sup>給</sup>のみか

とゝひとしくさたまり給へれとまこと

の太上天皇のきしきにはうけはり給はす<sup>儀式</sup>

河太上天皇封千五百戸二千勅旨田千町

弄問六条院御事也院号かうふらせ給ても

太上天皇の儀式にかはるやう如何

一勘封戸年官年爵などは太上天皇にかはる

所なければとも天子にてまし／＼し御門の脱履

の後の儀式ニハ又かはるへき事也是又勿論事也

問御封。戸といへるいか程の事をや

一勘戸は民戸也千戸万戸といふは民戸をよせ

らるゝ心也それを封戸といふ也

れいのこと／＼しからぬ御車にたてまつる檳榔也

院号を被蒙たれと御斟酌にてそとし

御車にめす也そさうなる車を<sup>（マ）</sup>檳榔毛の<sup>たる</sup>

車と云<sup>（マ）</sup>檳榔ヒリヤウケト讀也花鳥<sup>（マ）</sup>くはし

いかやうなる車なるへき哉一勘常の檳榔事也

院にもいみしくまちよろこひきこえさせ給ひて

朱の御病中なれと源に御對面なれば御心つよく

成給也又御心をつよくもたせ給也<sup>（マ）</sup>御心つよく成<sup>給可然也</sup>

たゝおはしますかたに 内儀へ源を入彼申也

故院にをくれ奉りし これより源詞也

(25ウ)

(26オ)

(26ウ)



つゐにかく見奉りなし侍るまで 源詞このかたの  
はいふかくとは世をいとはむと思なからうち過侍  
御出家ある。見奉ると也

院も物心ほそくおほさるゝ 朱也 けふかあすかと  
朱詞也

我世をはけふかあすかと待かひの涙の瀧といつれたかけん  
人の世の老をはてにせましかはけふかあすかとなけか  
雪山の鳥の声 今日不知死 明日不知死 何故造作栖さらまし (27才)

おこなひの心さしもかなふましけれと かくても

餘命なくては行末の心さして難遂と也

まほにあらぬ御けしきを 女三事を被仰度

おほしめせとも打出てはとの御氣色也

御心のうちにもさすかにゆかしき有さまなれば

源心に女三を床しく思召也

けにたゝ人よりも これより源語也

すゑの代のまうけの君 儲君

世のまつりこと御心になかふへしとはいひながら

源語也春宮政道の外にも女宮の事をは

なにとかなとは思召へけれどもそれ程には

有ましきと也

さるへき御あつかりをさためをかせ給ふへきに

なむ侍とそうし給

朱御在世の時可被定置由源詞也

さやうに思ひよる事に侍れと これより朱御詞也

(27ウ)

いにしへのためしをきゝ侍るにも 朱御詞皇女  
を給はる事嵯峨天皇皇女潔姫を

忠仁公に給し事在端尚シヤウスト云事ハ

天子御在位の時皇女を給をいふ也尚付字也

又しるすつる中にもすてかたき事ありて

朱御詞種々思案する事と也

又とりかへすへきにもあらぬ月日のすきゆけは

日月流邁歳不我與毛詩日月逝矣歳不我與論語

内親王一人 女三也問云女宮も親王宣下ありて

号するにや一勘合点

あつけきこえて 女三を源へ預申さんと也

おほいまうち君にせんせられて 先也 鷹事也

中納言のあそむ 夕霧也 源御返答也

たよりすくなくこそ 今少夕はたよりすく

行さきみしかくてつかうまつりさすことと侍らむ

源詞貽すくなけれと女三を預り申さんと也

夜にいりぬれはあるしの院かたままらうとのかん

たちめも 御一献まいる也

御あるしの事御さうし物にて あるしは飯事也

或説あるしの院法鉢御精進なれば御あるしの

ことく精進といふ歟 河花説あり

院の御まへにせんかうのかけはんはんに御はちなと

花 朝覲行幸時主上御前物へ紫檀懸盤六本打敷

に浅香のかけはん可准之くはし

(28ウ)

(28才)

(29才)

うるさければかゝす 草子地也

へたう大納言も御をくりにまいり給ふ

別当の大納言系圖になし

六条院はなま心くるしう 源紫に語給はん事

いかゝと也

前齋院をも 槿をも終にとけ給はねと紫の

油断也これより紫上のおとろへ給ふ事を

書也盛者必衰のことほりを思へし

なに心もなくしておはするに 源心中也

中／＼にいとふかさこそまさらめ

後わかためにいとゝあさくや成ぬらん野中の清水ふかさまされは

源心に女三をむかへ申たらはなを紫をふかく

思まさらむに其間なにかと思給はんをかなしと也

いまのとしころとなりてはましてかたみにへたて

聞え給はす

此近年紫と源との間威勢まさると也

その夜はうちやみて 朱より帰給し夜也

御物かたりきこえかはし給 源と紫と也

院のたのもしけなくなり給にたる 紫へ源詞也

えずく／＼しくもかへさひ申さてなん

源詞也辞退申さすと也

さためあるよにかはることはさらにあるましきを

紫にはちとも隔心有ましきなど源詞也

かの御ためこそ心くるしからめ 女三は御心くるし

(30オ)

かりなんと紫に對して源の、給也

それもかたわならすもてなし誰も／＼のとかにて

それもうつくしくしてましまさはと源のゝ給也

はかなき御さきひ事をたにめさましき物

におほして

さしもなきすさひことさへふかく思給ふ御心

なればと紫へ源詞也すさひは源のすき心の

いとつれなくてあはれなる御ゆつりにこそは

紫のちとも無動転あはれなる御ゆつりと返答也

かのはゝ女御の御かたさまにてもうとからすおほし

かすまへてんやとひけし給を

藤つほの女御は式部卿の御妹紫上の御おは也

紫の卑下しての給也

あまりかううちとけ給御ゆるしめいかなればと

餘にうちゆるへて被仰もいかゝ源詞也

ひか事きこえなとせん人のこと 中事有へき

をきゝ入給なと也

すへてよの人のくちといふ物ななにかいひいつる

事もなくをのつから人のなからひうちほうゆか

思はすなる事いてくる物なめるを 方ゆかみ也

人なかを人そさくするゆめよ君人のなかこときゝたつな君

河魯平公事 孟子の語なとあり

心のうちにもかく空よりいてにたるやうなること

紫の心中に天よりふりたるやうなる事と也

(31オ)

(30ウ)

をのかとちの心よりおこれるけさうにもあら

せかるへきかたなき物からおこかましく思むす

はるゝさま 源の心よりおこらぬ事なれば也又せき

申やうの御人からにてもなくこれは別儀なる程に人

にしられぬやうにしてあらむと紫の分別神妙也

式部卿宮のおほきたのかた 紫継母也

うけはしけなる 咒詛也のろふ也

伊勢物語昔宮の内にてあるこたちのつほね

のまへを渡けるになにのあたにか思けんよしや

草葉にならむさかみんといふ男

つみもなき人をうけへは忘草をのかうへにそおふといふ

大将の御ことにてさへ 髯黒の事を前にいひし

紫の玉の事をとりもたれたると継母のいふ也

いかてかはかはかりのくまはなからむ 紫の心にかやうの事はまう有ましきと思つれば又

如此事出来と也

世の人わらへならむ事をしたには思ひつゝけ給へと

紫上のさいはいにむくひのある事をかけり

としもかへりぬ 源四十に成給也

人々いとくちおしくおほしなけくうち

女三を申かけたる人々也

内にも御心はへありて聞え給 叡慮も趣也

ことしよそちに成給ひければ御賀の事

内より御賀を源へ給はんとありしをかたく

(31ウ)

斟酌申されたりかへさひ申給とは 復論語

昭宣公四十賀在古今集 貞観十四年也

貞辰親王四十賀同前 此外其例多取要書之

にははかにいさめかへしきこえ給はす 玉の沙汰

もせず俄に賀の事申おこなひ給へは源の

斟酌に不及由也

さばかりの御いきほひなれば 玉の父も夫もいかめしき

みなみのおとゝのにしのはなちいてに

河放出母屋也 廂の名也云々六条院の南の

おとゝの西の對放出放出事前注之出居事也

かへしろなとたてすちしき四十枚御しとねけうそく

壁代 又防壁 地敷 茵 脇息

此卷紫上二条院にての御賀にも倚子を立

たりとみえたり是は略義敷

地舖は唐筵に大文高麗へりを付たる物也

或龍鬚地舖あり龍鬚の地舖は氈のたくひ成

らてんの御つし二よろひに御ころも箱四すへて

螺鈿

御ころもはこ四すへて夏冬の御さうそく

四十賀なれば何も四十つゝ也

花仁和元太政大臣賀夏冬御さうそくは四季を

云也 臥見屏風有数々

かうこ菓のはこ御すゝりゆするつきかゝけのはこ

かやうの事に玉かつら上手也 寢殿装束の

(33オ)

(33ウ)

事河ニくはし

御かさしのたいにはちんしたんをつくりめつらしき  
あやめをつくしおなしきかねをも

河一切の物にもんのあるをはあやめといふなり

定家卿説也これも木の本わき目などの

事也あやすきともいふ也弄造花を臺ニをく

老をかくす心也粹頭の花也

かんの君に御たいめん 源の先内々の對面なり

みやひふかく閑麗玉の優美なる心也

御心のうちにはいにしへおほしいつることゝもさまく

なりけんかし 草子地也

かく賀なといふことはひかかそへにやと 源詞也

おさなき君も 玉の子とも也

大将のかゝるつゐてにたに御覽せさせんとて

ふたりおなしやうにふりわけかみのなに心なき

引哥くらへこしゝ—— 河鬚大将校の同胞男子

二人二十一歳也

これをふりわけかみと云也河説異也玉の腹也三四はか

りなるへし

玉の哥に若葉さす野への小松を引つめてと

かゝるすゑくのもよほしになむ あり いまた老たるとは

思はぬに孫ともをみるよと也

中納言のいつしかまうけたなるを 夕の御子達

おほくあれといまた見給はぬと也

(34才)

人よりことにかそへとり給へるけふのねのひ  
河上東門院より六十賀おこなひ給ける時

よみ侍ける

かそへしる人なかりせはおく山の谷の松とや年をつまゝし

御堂殿在  
榮花物語人よりことには第一に賀し給心也

わか葉さす野への小松を引つれてもとのいはねをいのる けふ哉

玉の哥子とも引つれと也もとの岩ねは源の

御恩と云心也

せめておとなひきこえ給 しゐての心也源に

はちなから也

さまはかりまいれり 祝儀斗也 幽玄也

こ松原すゑのよはひにひかれてや野へのわかなもとしをつむへ き

春日のゝわかなならねと君かため年の数をもつまむとそ おもふ

源哥千秋万歳をつまむと也末遠き人の齡にひか

れて年をつむへしと也

式部卿宮はまいりにく、おほしけれと 紫父也玉の

取もちなれは也

大将のしたりかほにて 鬚の様軀を式部卿の心也

御むまこのきんたちはいつかたにつけても

枝の兄弟達は式部卿宮の御孫也

おりたちてさうやくし給 雑伎

こものよそえたおもひつ物よそち 籠物

四十枚 折積 物 在 桐  
弄 籠物 献物 両義

御かはらけくたりわかなのあつ物まいる

(35才)

(35ウ)

(36才)

うつほの物語云しろかねのひさけにわかなの  
あつ物一なへ御賀御記河ニアリ

おほんつきとも 御器

朱雀院の御くすりの事 御悩也

楽人などはめさす 御悩ゆへ楽はなき也 河海

命侍臣令奏弦哥例アリ

しのひやかに御あそひあり 御遊也面たちたる

楽はなかりし也御ふみなど、は楽器惣名也

わこむはかのおと、の第一に秘し給ける御ことなり

おほきおと、にならひて右衛門督の調給し也

柏の父おと、にもをとらず引給也

衛門のかみのかたくなふるを 固辞

上すのつきといひなからかくしもえつかぬわざそ かし

河継嗣 和琴 和名曰 日本琴 委アリ

もろこしのつたへ 調子は定れる物なれと秘調

と云て手かある也

すか、きに 和琴にかきる事也 緩

ち、おと、はことのをもいとゆるにはりていたう

くたしてしらへひ、きおほくあはせていたう 調 聲

くたしてかきならし給これはいとわら、かに 和

のほるねのなつかしく

下の声にてひ、く也のほれるねとは上音に

てたかき也云々

わら、かに 称説にこまやかなる音と云々

(36ウ)

この御ことはきやうてんの御ものにて代々に第一の  
名ありし御ことを

宜陽殿ニ累代御物を被置也花ニくはし

一品宮 女一宮也 母朱雀院におなし

きむはおまへにゆつりきこえさせ給ふ

兵部卿宮の源へゆつり給也

さうかの人々みはしにめして 唱歌河ニ委

かへりこゑになり 呂の律になる也反音律也

青柳あそひ給程にねくらの鶯おとろきぬ

河青柳 律 拍子 倍長生楽序 十二

青柳をかたいとによりてをけや鶯のかさにぬふてふかさは梅の花 かし

此御遊夜景になるによりていへり弄青柳に (38オ)

鶯もおとろきぬへしとかける妙也如本

わたくしことのさまにしなし給て様なといと

きやうさくにまうけられたり

公方事には様なと定れる也これは私の事

には別而結構せらるゝ也

問云わたくしことのさまにしなしして如何きやう

さくに如何一勘此御賀はもとよりわたくしの

礼儀也きやうさくは邊迹と書たとへはすく

れたる心なるへしわたくしことは卑下したる

義也様なときやうさくは可然し給也

あかつきにかむの君かへり給ふ 玉也

かう世をすつるやうにて 源詞也

(37ウ)

(38ウ)

年月の行多もしらすかはなるを

とし月のゆくゑもしらぬ山かつは瀧の音にや春をしるらん

かうかそへしらせ給へるにつけて

後かそへしる人なかりせはいたつらに谷の松とや年をつまゝし

時々は老やまさるとみたまひくらへよかし

時々は御覽し舞給へかしと玉へ源詞也

いとあかすくちおしくそおほされける 玉の滞留

なき事也

かく世にすみはて給につけても 玉の身の定

る也か様にしてあるも源の御恩と玉の詞也

わかなまいりし西のはなちいてに御丁たてゝ

震殿也御丁はいつもしつけて置也御木丁は

臺にかけて持ありく物也

うちにまいり給人のさほう 入内のことしと也

源氏院号以後なれば入内の儀式准せらるゝ

入上宮同事也

御をくりに入達部なとあまたまいり給

公卿も供奉也

御車よせたる所に院わたり給ておろし奉り

給なともれいにたかひたる事ともなり

河臣下の礼は妻を迎時はみつから車を寄

礼也云々院中の義ニは此義あるへからざる歟

然而六条院たゝ人のことくふるまひて卑

下し給由歟

(39ウ)

問云臣下の礼は妻を迎る時みつから車をよする  
也河ニあり如然歟

一勘大略如此れいにたかひたる事ともとは

源には似合ざる義と云心也

むこの大君といはむにもことたかひて

花吾家の曲の詞也弄王孫の事也

たいのうへもことにふれておほされぬ

紫心に勝事の出来也と思給也

又ならふ人なく 此程は紫にならふかたなき也

おひさきとをくあなつりにくきけはひにて

かやうにあるとて紫のたとり給事はなけ

れとも行末をいかゝと思て何事をも取

持れたる也

ひたみちにわかひ給へり 女三は一向におとな

き様はなきと也

かのむらさきのゆかり 紫をも取たゝてありし

かは心のしかとしたる程にいふかひありつると也

かれはいとされてとはしかとあると也

これはいといはけなくのみみえ給へはよかめり

にくけにをしたちたることなと

女三は嫉妬なとは難被仰やうなりと也

いとあまりものゝはえなき御さまかなと

女三はあまり物よはきやうなると也

三日か程はよかれなく 女三へ源のわたり給ふ也

(41オ)

(40ウ)

(40オ)

年ころさもならひ給はぬこゝちに紫<sup>(むら)</sup>とは一夜

もよかれ給はぬにと也

御そともなといよ／＼たきしめさせ 源を紫の

崇敬心さまきとく也

うちなかめてものし給 源の物あんしをして

紫の方に有たきと也

おかしなとてよろつの事 源後悔何として

御請を申たるそと也

わかかれと中納言 夕はわかかれは心つよかる

へきとて不被仰懸也

こよひはかり 紫へ源詞也

又さりとてかの院に 源のとつづをいつあんし給ふ也

すこしほゝゑみて 紫也

身つからの御心ながら 紫詞也と絶あらしと源の

の給詞ありしにうけての給也

ましてことほりなにもいつことにとまるへき

紫詞也何事も定らぬ御心なればと也

はつかしうさへおほえ給て 源心なり

つらつえ 支願 引哥なけきこる山とし

めにちかくうつれはかはる世中を行末とをくたのみける哉 (42オ)

紫哥時のまに源心かはるよと也頼ける哉面白也

貫之集云女のもとよりをこせたりける

秋萩の下葉につけてめにちかくよそなる人の心をそ

ふることなと 此やうにあたなる人の心の例を

みる

(41ウ)

紫の書給也

命こそたゆとも絶めさためなきよのつねならぬ中の契を

源返哥也限あるいのちはたゆとも源と紫と

の契はよのつねならねはかはるましきと也

三四句の心はさためなき世のならひならぬ

契と云心也

とみにもえわたり給はぬ 女三へ源御出なきを何

とて御出なきと紫の被申也

いとたゝにはあらずかし 源の渡給ふを紫心也

年ころさもやあらんと 權又朧などのやうなる

事もありつれば実なる事はなかりし

にと思つればあり／＼てかやうの事出来と紫心也

あり／＼てかく世のきゝみゝも 紫心也今と成て

おされぬ事出来也一切はやかうと思事は

なき物也こゝを誰も可愼事とそ

河論語曰曾子啓子足、——詩云戰々、——身體

髮膚、——孝は今日ニおはりたるそと也

今より後もうしろめたくそ 今よりの行末も

いかなる事も可出来也不定世界なれば

不識たゝ戰々競々、——の心を得へし

いつかたにもみなこなたの御けはひにはかたさり

紫の外ニ源の御心ニ用捨ある人はなきと也

をしたちてかはかりなるありさまにけたれて

もすくし給はし

(43オ)

(42ウ)

源のならへてをき給程御かた／＼の紫を、し  
給人はなし此女三はさやうには有ましき程  
に  
必煩しき事可出来と祇候の人申事也

(43ウ)

かくこれかれあまた物し給めれと御心にかなひていまめかしくすぐれたるきにもあらずとめなれてさう／＼しくおほしたりつるに此宮のかくわたり給へるこそめやすけれなをわらは心のうせぬにやあらむわれもむつひきこえてあらまほしきをあいなくへたて

かくこれかれといふより紫詞也前々よりの人たちはめなれていつもの事とおほしつるに女三の御出は可然事也わらは心のうせぬにやあらむとは女三へ細々まいりてあそひなとしたりと也あいなくへたてあるさまにとは嫉妬の心もあるらむと人々はとりなさむ我はさもなき物をと各に紫の、給ふ也

(44オ)

ひとしき程をとりさまなとおもふ人にこそ

我とひとしき程の人又した程の人にこそ妬をもせんすらめと女三は位たかき事なれはと紫詞也

中務中将君 もとは源の方にありし須磨へ下

向の時より紫の方にあり

あまりなる御思やりかなといふへし 草子地也  
むかしはた、ならぬさまにつかひならし給し人とも

(44ウ)

紫の官女どもの事也中将君は源とひとつにて常は紫と隔心ありしか女三の御出より紫へ帰復也

こと御かた／＼よりもいかにおほすらん 女三の渡らせ給てさそと方々よりとふらひ給也

中／＼心やすきを 蓬生などのやうなる人の中／＼思はなれたる心安也紫は心くるしからむと也かくをしはかる人こそ中／＼くるしけれ世中もいとつねなき物をとてかさのみは思なやまむをしはかる人の心にかはりて紫はさらに思なやまぬと世中といふ物はかやうにあらんと紫の願念也

(45オ)

あまり久しきよひる 源の御留守によひに

久しく給はいか、人の思はんと也

かのすまの御わかれのおりなと 紫のとつづきつ思給也

御身までの事はうちをきて

いかにかと思心のある時は我身を、きて人ぞ悲しきわれも人も命たへすなりなましかは

只今の御夜かれに思めぐらせは須磨にうつろひ給し時源にても我にても命絶たらは

と思なくさむと紫心中也

夜ふかき鳥のこゑ 一番鳥也

わざとつらしとにはあらねとかやうに思乱れ給け

(45ウ)



にやかの御夢にみえ給ひければ 紫のつらしと

はさして思給はねと色々思給ゆへにや源の

夢に見給てきと驚て帰給ふ也

あけくれの空に雪のひかりみえて 明闇也

明くれの空にそわれはまとひぬるおもふこゝろのゆかぬ

御匂ひやみはあやなしと 源の御うつり香也

春の夜の闇はあやなし梅花、――

雪はところくきえのこりたるか 面白駄也

なをのこる雪としのひやかにくちすさみ給つ、

子城陰處猶殘雪御鼓聲ノ前未有塵塵清雪白楽天

弄詩心如何一勘子城へ北方城敷雪に付て楽天か作を

誦たるはかり也只北向の方はいまたのこる雪也

ひさしくかゝる事なかりけるならひに人々もそらね

よそよりかやうにはやく御帰はまれなると

紫の官女とも思てそらねをしてゐる也

女官とも心を合て源をまたせ申也其下は思

こよなく久しかりつるに身もひえにけるは

妻戸をた、かせ給事源詞也紫におち

たる心にかやうにひえたると也

さるはつみもなしやとて 源のかへりみ也紫へ

道理との給也面白書やう也

すこしぬれたる御ひとへの袖をひきかくして

紫へうちとけたるやうにはなくて又はつかしけなる

かきりなき人ときこゆれと 女三宮と申せとも

也

(46才)

紫程にはなきと源心也

その日はくらし給へはえわたり給はて 紫のかた

に源の終日まします也

しん殿には 女三へ

けさの雪に心地あやまりて 女三へ源の文詞也

御めのとさきこえさせ侍りぬ 乳母のかるくくと

返事申たる也

ことなる事なの御かへりやとおほす 源心也

院にきこしめさむことも 朱へ源心也

女君も思やりなき御心かなとくるしかり給ふ

紫の心源のこなたにおはしますは不可然と也

ことにはつかしけもなき御さまなれと御筆ひき

つころひて 女三へ文をまいらせらるゝははつかし

けもなければとも執申さるゝ心に御筆引つ

くろひ給也又あたりの人のみむとの心なり

なかみちをへたつる程はなけれども心みたるゝけさ

後かつきえて空にみたるゝあは雪は物おもふ人のこゝろ也けり

中道を隔つる程の雪にてはなく薄けれ

ともと也

はしちかくおはします 源の紫に忍て女三の御

返事を待給心也花をまさくりてとは文に

つけし花の残なるへし

ともまつ雪の 詩には待伴とアリ

ふりそめて伴待雪はむは玉のわかろかみのかはる也けり

(47才)

(46ウ)

(47ウ)

(48才)

袖こそ匂へと花を引かくして 源のまさくり  
給ふ花を鶯に引かくし給也

折つれば袖こそにはへ梅花、――

かゝる人のおやにてをまさくらめとみえ給はす

源の位高人はおもくしき物なれとさやう

にもなくわかくみえ給ふと云事也

御かへりすこし程ふる心ちすれはいり給て女君に

花みせ奉り給ふ 女三より御返哥をそき

程にまきはして紫へ花をみせ被申也

花といは、かくこそにはまほしけれな

梅の事也

桜にうつしては又ちりはかりも心わくかたなくや

あらましなどの給ふ

梅かゝを桜の花に、ほはせて、――別の花に心をつけぬ  
これもあまたうつろはぬ程めとまるとやあらむ花  
のさかりならへて見はや 花の盛は梅也

桜と梅との事也 花鳥に紫と女三とならへて

みはやとありそれはいかゝとおほえ侍るた、其

花／＼の上の事とみるへし花鳥紫を桜に

たとへ給へりちりはかりはすこしはかり也と云々

弄桜にうつして梅かゝを桜の花にの心也梅はかりに

心をとめたるにやと云也花のさかりに桜に

梅をもならへて見はやと也

手此詞紫に源の給也此時紫の心をとるまき

(48ウ)

らはしに花の批判し給也女三紫上などに  
花をたとへたる義は不用之あまたうつろは  
ぬと

は紫花の未開時分梅のさきたる事也 再開委細之  
上も

くれなゐのうすやうにあさやかにをしつゝ、まれたる

女三の御返しを紫のまします所へ持来程に

源の胸つふれたり

しりめに見おこせてそひふし給へり 紫の彼御

返しをしりめに見給つゝ、副臥也

はかなくてうはの空にそ消ぬへき風にたゝよふ春のあは雪

御ていとわかくおさなけなり 女三御手跡よく

もなき程にと也

さはかりの程になりぬる人は 紫心に女三の御手跡

よくもなきと思給へとも女三の事なれば

何ともの給はぬ也

こと人のうへなとならばさこそあれなとは忍て

聞え給けれと 別の人ならば申へきをと

御手の事を源の給ふ也

いとおしくてたゝ心やすくを思ひなし給へと

のみきこえ給 源の詞に對して紫詞也

けふは宮の御かたにひるわたり給ふ 三夜の後

目ひる御出を女三の方の衆の見奉る也

女房衆今はしめ見奉る也

ひとゝころこそめてたけれめさましきことは

ありなにかし 女三の方に祇候人の源を

(50オ)

(50ウ)

見奉て紫上一所こそ源のめて給はん  
すれ皆さふらふ人々は源をめさましと思  
はんと也

うちませて思ふもありけん 女三の方の女房衆  
の源をみてねたむ心也

よたけく こゝにてはことゝしきさま也  
いと御そかちに見もなくあえかなり

御そかちとはいまたちいさくて衣裳に  
つゝまれたるやう也 あえかは幼稚なると也

ことにはちなともし給はす 女三の源に  
恥給はて人おめせぬ子のやうなると也

院の御門はおゝしく 朱は男々しき也  
御さえなとこそ心もとなくおはしますと世の人も

朱はさ程学文はましまさぬと也  
なとてかくおいらかにおふしたて給けん

何とてかやうにそたて給ふそと源心也  
おいらかには大やう也

人<sup>やう</sup>ことに老らかに心得たるさにはあらずさきの  
詞にも女三をはちこのおもきらひせぬ心地

してなとありおさなゝしく物はかなし  
と聞えたりこれもおひれたるよしなり

ねおひれてなといふやう也  
さるはいと見心とゝめ給へる

源の心也朱の女三を  
一段の御愛子なればとてか様にそたて給かと也

(51オ)

御いらへなともおほえ給ける事は 源の物を

問給へはおほえ給程の事は女三の答給也

え見はなたす 笑也物こらへせぬ人かよく笑

物也女三の事也

むかしの心ならましかはうたて心おとりせましを

源心也若年の時善悪をえらふ時ならはと也  
とあるもかゝるもきははなるゝ事はかたき物なり

そのきはのはなるゝ事はなきと也きはとは  
かきりと云心也花鳥<sup>ニ</sup>はその人のしなほと

よりぬけいてゝよきをいふ云々

よその思ひはいとあらまほしきほとなりかし  
よそよりはさもこそはあらめと思ひてとへ

は一向さやうにはなき物を紫の躰はよきと也  
われなからもおふしたてけりとおほす

よかれすみるにたいの上はよきと也  
花鳥説わろし

花鳥<sup>ニ</sup>には源心に女三をよそにて思ひしは  
よろつあらまほしきさまにおほえしは

紫上にさしならへて見給へはありかたく  
我なからよくもおふしたてたと思はるゝと也

一夜のほとあしたのまもこひしく 源と紫との  
間のよきを思へはいまはしきまてみえたりと

草子地也ゆゝしきまてなんといふまて地也  
院の御門は月のうちに御てらに

二月中也

(52オ)

(52ウ)

(53ウ)

この院にあはれる御せうそことも 源へ也  
むらさきのうへにも御せうそここにあり

おさなき人の心地なきさまにて 御文の詞也

紫上号これよりはしまる也

たつね給へきゆへもやあらむとそ 女三と紫

との母方のいとこにておはします也

先帝 式部卿宮 紫上

薄雲女院

源氏宮

朱雀院春宮の御時より参給て女三宮を  
うみ給藤壺と聞えき此巻にてうせ給

そむきにしこの世にのこる心こそいる山みちのはたしなり

けれ

朱御哥子を思みちははなれぬと也

世のうきめみえぬ山ちへいらむには思ふ人こそはたしなり

けれ

やみをはるけて 女三を思給ふ事也

そむく世のうしろめたくはさりかたきほたしをしめてかけなはなれ

それ

紫上御哥

女のさうそく 裳からきぬなど也

御てなとのいとめてたさを院御らんして

紫の手跡を朱の御ほうひ也

今とはて女御更衣たちなと 草子地也

内侍のかむの君 朧月夜尚侍二条宮にあり

太政大臣  
萬宅也

問云后宮のおはせし所なれば宮といへる歟一勘合点

姫宮の御事をきてはこの御ことをなん

朧と女三とを同じく朱の思召也

今一たひあひみてそのよのことも

朧に源の逢奉りたくおほす也

あるましき事とは 朧へ音信申へき事

にはなけれどもと源心にはおほしなから

哀なる様にさいく申さるゝ也

むかしの中納言の君 朧の人媒なり

そこにも又人にもらし給はし 朧の事也

かなしき事をさしをきて 朱の御事をさしをき

て也朱に別給ふ時なれば也

心のとほむこそいとはつかしかるへけれと

なき名そと人にはいひてありぬへし心のとほゝいかゝこたへん

天知 地知 人知 自知 此四ハ一心ニ浮ハ早知者也

いにしへわりなかりし世にたに

源詞也弘徽殿のまします時さへ逢奉り

たるにとの心也

あらざりしことにあらねは 今はしめて逢奉

事ならねはと源心也うしろめたきやうなれ

とゝは朱へ對して也

立にしわか名今さらに

むら鳥のたちにし我名いまさらにことなしふともしるしあらめや

このしのたの杜をしるへにて

いつみなるしのたの杜のくすの木の子枝にわかれて物をこそ

和泉守事

思へ

女君には 紫上也

ひんかしの院にもするひたちの君 二条院東院也

(53ウ)

(54オ)

(54ウ)

(55オ)

心けさうし給ふをれいはさしもみえ給はぬあたりをあやしと見給ひて

(55ウ)

紫心に常陸宮事はいつもの事にてあるをと思給也

姫宮の御ことの、ち 女三の御出之後は紫の源

へ何事も斟酌也

あしろ車の昔おほえてやつれたる 須磨への

折節やつれたる車なとありし事也

いつみのかみして 隴へ源の御参との事也

されはよと 隴はかるくしきよと源心也

みさうしのしりはかりかため 障子をほそくあけて人のとをらぬ程にしてしりさしをしたる心

(56オ)

いとわかやかなる心地もするかな 源詞也

玉藻にあそふをしのこゑ

春の池の玉もにあそふには鳥のあしのいとなき恋もする

哉

人めすくなき宮のうちのありさま 隴の住給也

平仲かまねならねと こゝにては偽にても

へきを真実ニなき給也

河平仲定女にことに心さしあるよしをみえむ

とて硯のかめに水を入れて持て目をぬらして

なくまねをしけるを女しりてすみを摺て

入をけるをしらていつものことくしけると

也末つむの巻に注

(56ウ)

これをかくやとひきうこかし給 障子を引あけんとする心也

とし月を中にへたて、あふ坂のさもせきかたよくつる涙か

源哥也あひ奉りし事は昔の事と也

涙のみせきとめかたきし水にて行あふみちははやく絶にき

もる人のあるとはきけと逢坂のせきもと、めぬわか涙かな

隴返哥涙はつきせぬ逢事は絶はてたと也

近江によせたり

つしやかなる所はおはせさりし人の 隴御心よはき

を本性といふ義也

昔藤のえんし給しこのころのことなりかし

扇をとられてからきめをするとの時の事也

この藤よいかにそめけん色にか 隴によそへの給也

御宮つかへにもかきりありてきはことにはなれ給ふ

事もなかりしを 隴は女御には成給はす内侍

のかみは過分なる職にてもなき也

故宮のよろつに 弘徽殿事也

やうくさしあかり行に 朝日也

こはつくりきこゆ 源御迎衆也

しつみしも忘れぬ物をこりすまに身もなけつへきやとの藤波

河こりすまに又もなき名は立ぬへし人にくからぬ世にしす

さほさせとふかさもしらぬふちなれは色をは人もしらしとそ

貴之藤を例に  
よせたる例也

恋しきに身もなけつへしなくさむることにしたかふ心なら

ねは

(57ウ)

(57オ)

源哥隼へ須磨にしつみしを又こりすまに逢奉也

藤を刈にしつまんと云なしたる也

花のかけは猶 源に心をかけし也 隼心也

身をなけんふちもまことのふちならてかけしやさらにこり

(58オ)

源の身をなけんとの給もさらに誠にてはなし昔

すまの涙

のやうにうちとけぬへき事にてはなきゆへなれば

との給也

関もりのかたからぬたゆみにや よき透にかたらひ給と也

人しれぬ我がよひちの関守はよひくことにうちもねな

ん

そのかみも人よりことなく 人のしらぬやうにして

源の隼より帰給也

女君さはかりならむと心え給へれと 紫の隼より

帰給と思給へとしらぬかはをしますす也

ありしよりけに

(58ウ)

忘るらんと思ふ心のうたかひにありしよりけに物そかな

しき

ななき世をかけてきこえ給 紫のねたみ給はて

おほめかしくもてなし給程に此まゝみはなち

給てはと思給てありしにすくれてふかき

契をななき世をかけて源のゝ給也

かむの君の御ことも又もらすへきならねと

隼の事を紫に申へき事ならねといにしへの

事も知給へは今一たひもとの給也

うちわらひていまめかしくもなりかへる御ありさま

かな

紫のうちわらひてわかしく成かへり給と也

(59オ)

むかしをいまにあらためくはへ給程なかそなる

しつやしつしつのをたまきくり返し昔を今になすよしも

かな

紫の我こそ中空になるへきと也

かう心やすからぬ御けしきこそくるしけれど、おい

かにひきつみなとをしへ給へ

紫の隔心の躰を源の勝事におほえてひき

つめりてもおほせられよしらぬかほしてま

ませはと也

なに事もえ残し給はす 源の紫の機嫌を取

給ほとに何事もかくし給はぬ也

宮の御かたにもとみにえわたり給はす

女三へも紫の気色を伺てわたり給也

きりつほの御かたは 明石中宮十三歳也

うちはへまかて給はす 明石姫君を御門の御

寵愛甚ければまかて給はす

夏ころなやましくし給を 明石中宮御懷妊

またいとあえかなる御程に 中宮十四才なれば

御産いかゝのよし誰もく思と也手弄ニ十三才トアリ如何

姫宮のおはしますおとゝのひんかしおもてに御かたは

しつらひたり 女三のおはします所也

たいのうへこなたにわたりてたいめんし給

明石と紫と御参会也

ひめ宮にも中の戸あけてきこえん

女三へけんさん申へきと紫の源へ申され

(60オ)

(59ウ)

たれは満足し給てうち多み給ふ也

うしろやすくをしへなし給へかしと 女三へ何事

もをしへ給へと源の紫への給也

宮よりもあかしの君のはつかしけにて 女三へ

對面よりも明石にはつかしきと紫心也

おとゝは宮の御かたにわたり給て 女三へ源也

ゆふかたかのたいに侍る人のしけいさにたいめん

せむとて 源詞也

たいに侍る人とは紫上しけいさにとは

明石の上の事也

ゆるしてかたらひ給へ心なといとよき人也

源の女三へ紫事を申さるゝ詞也

はつかうしうこそはあらめ 女三御返答也

人のいらへはことにしたかひてこそはおほしいて

源の女三にをしへ也

人の返答はそれゝの詞に随てこそあれと也

さの給はむを心へたてんもあいなしとおほす也

紫の對面有へきとの事を何かとありて

も愛もなき事と也草子地也

たいにはかくていてたちなと 紫の御對面の用意也

われよりかみの人はやはあるへき身の程はか

なきさまを

紫よりかみの人はなかりしと也花鳥説如何

弄これ又如何

(60ウ)

再問返答云紫上は嫁娶礼はなかりし也

野合とて我とゝいひ合也孔子の母も

野合也紫はおとらねと女三は本臺にて

震殿ニましますと也

をのつからふることも 人は心にある事をすさ

ひ事にする物也

みつからそおほししらるゝ 紫の心也

宮女御の君などの御さま 明石上秋好などの

御目うつりには紫は年よられたれとゝほめ

ての給ふと源心に能書也おとろかるへきにも

あらすは源心に紫を思ひさため給也

こそよりことしは 紫上をほめ給也

うちとけたる御手ならひ 色ゝの恨たる事

を紫のかき給ふ也

身にちかく秋やきぬらんみるまゝにあをのはの山もうつろひに

紫哥妹やきぬらんとは源心にあき給ふやと也

手習に書給あをのはの山名所にあらす只青

葉也うつろひにけりとある所に源のめをとゝ

め給也河海説用之

水鳥のあををはゝ色もかはらぬを萩のしたこそけしきことなれ

源哥青葉はうつろふを水鳥の羽はうつろはぬと也

萩の下こそとは我心はかはらぬをそなたの

心よりおほしなると也

こよひはいつかたにも御いとまありぬへければかの

(62オ)

(61ウ)

(62ウ)

しのひ所に

紫と明石上と對面なれば朧月夜へ參給也

春宮の御かたはしちのは、君よりもこの御かた

明石姫君東宮の女御なるを申也実母也

此御かたとは紫事也

中の戸あけて宮にもたいめんし給へり

女三へ紫の見参いまたおさなくましませば

心やく又は御いとこなれば也

中納言のめのと 女三の御乳母なり

おなしかさしをたつねきこゆれば 紫詞也

系図にみゆ

我やと、たのむよし野に君しいらはおなしかさしをさしもこそ

いまよりはうとからす 紫詞也

たのもしき御かけともに 中納言詞也女三母は

此卷ニうせ給へり

そむき給ひにしうへの御心むけも 朱の御心の事也

うち／＼にも ない／＼朱の仰と中納言詞也

いとかたしけなかりし御せうそこの、ち

紫詞也朱の文かたしけなき程にいかにとも

思ふと也

けにいとわかく心よけなる人かなとうちとけ奉り

女三御心に紫をおもひ給へる也

さてのちも 女三と紫と仰通らるゝ也

世中の人もあいなふ 世間ニハ紫の妬給と云也

(63ウ)

このとし比のやうにおはせし 紫の威勢おとる

やうに世間に申つれとも弥源の心さしふか

もまさればそれにつきて猶やすからす人の

いひなすにちともうわなりかましく紫のし給は

て參給也

事なをりてめやすくなむありける 人の色々ニ

いひし事なをりたる也

神無月にたいの上院の御賀にさかの御たうにて

これより源の御賀を紫のとりおこなひ給ふ也

薬師仏 源の祈禱に紫の供養の事させ

らるゝ也さかの、御たう見松風巻源の

たて給ふ也猶くはし

ほとけ経はこちすのと、のへ 帙寶

最勝王 金剛 さいそうわう経こんかうはんにやすみやう経なと

これを鎮護国家の三部経と云也

いとゆたけき御いのりなり 廣大なるとの事也

廿三日を御としみの日にて 源誕生緣日年

満也年のみつる也河ニ御賀試樂日也云々

弄正月廿三日子日なるに御出事ありき

此院はかくすきまなくつとひ給へる 六条院所せ

によりて二条院にて行るゝ也宴舞樂

ありさかにては法事也

ゐんし 六条院の院司也

しむてんのはなちいてをれいのしつらひてらてん

(64ウ)

(65オ)

(64オ)



のいしたてたり

承平七十二陽成院御賀心殿西放出第三間立螺鈿椅子

花問椅子をたつるはいかやうの人の賀にもある  
弄

へき敷一勘花鳥ニ先例等のせ侍りに人

よるへき事敷主上々皇の外は不審也

をき物のつくあふたつからの地の からの羅といふ本  
あり

猶花ニくはし孟津抄ニアリ

比花足

かさしのたいちんのくゑそくこかねのとりしろ

かねの枝にあたる心はへなと

花嘉祥三仁明四十御賀御拝頭臺造沈香

山以金為鶴令含御拝頭花

あかしの御かた かさしのたいをさせ給ふ也

うしろの御屏風四てうは式部卿宮なんせさせ給へる

いみしくつくしてれいのしきのあなれと 紫の父宮  
也

古今云内侍のかみ右大將藤原朝臣の四十賀

しける時に四季のあかけるうしろの屏風に

かきたる哥略之孟津抄ニアリ

めつらしきせんすいたんなど 庭のたん壇也

たきとある本不用

ふたいの左右にかく人のひらはりうちて

ひたんみきとよむへし

平張をうちて樂の行事といふ役者はしむる也

四十つゝけたてたり 四十賀によれり

ひつしの時はかりにかく人まいる 延喜六十一

(66才)

十日御賀先奏万歳楽蘊合香次皇<sup>ハ</sup>章

猶孟津抄ニ注

まむさいらくわうしやうなと 河万歳楽拍子二十

新楽中曲

こまのらむしやうしてらくそんのまひ出たる程

高麗乱聲落蹲河ニくはし

いりあやをはのかに 舞有取綾手故曰入綾舞入也

権中納言 夕霧

問云 柏木

衛門督らくそんを舞たる歟 舞人にくはし

て舞へき歟 一勘合点

いにしへの朱雀院の行幸にせいかいはのいみしかりし

紅葉賀ニありし事也

つかさくらるはやゝすゝみて 昔の紅葉賀の時源

氏は中将致仕のおとゝは頭中将にて舞つかう

給ふ今の権中納言は夕霧柏木は衛門督也

まつり

あるしの院 源也 涙くみ給ふ事何事そや

北の政所の別當とも 源の院号以後政所と書

ましきと卑下し給也河花ニくはし

千とせをかねてあそふつるのけころも

祝言をそと書也河ニあり

むかしおほえたる物のねとも 楽器はみな名物也

なにおりにも過にしかたの御ありさまうち

わたりなとおほしいてらる故入道宮のおはしましかは

源のいにしを思出給殊更卅七にてかくれ

(67才)

(66ウ)

給薄雲事也

我こそすゝみつかうまづらましかにことに 源心也

(67ウ)

内にも古宮のおはしまさぬ事を

冷の薄雲をおほし出給也

この院の御事を 薄雲を思召程に源事を

能おほしめさむと冷心也

れいのおとあるさまにかしこまりをつくしても

冷の実父のやうにせぬと也

ことしはこの御賀に 行幸あるへきとおほしめし

たる也

世の中のおつらひならむ 行幸は国民の煩なれば

とて思召とまらせ給也尤殊勝也猶孟津ニアリ

しはすの廿日あまりの程に中宮まかてさせ給て

其礼孟津抄ニ注

ならの京の七大寺にみすきやうぬの四千たんこのち

かき都の四十寺にきぬ四百疋

南京七大寺東大 興福 元興 大安 薬師 西大 法隆

北京七大寺不定花河ニくはし 弄四十寺有例

問云ちかき都の四十寺の在所さたまれるにや

秋好より源の賀をさせ給ふ也

一勘大略のこる寺あるへからざる歟定たる所なし

ちゝ宮はゝみやす所 秋好の父母のおはしまさは

賀をせんするにと心さして源の賀をし給也

おほやけにもきこえさせ給へは 源詞造作事は

御無用と公方へも申たると也

四十賀といふ事はさきゝ 四十賀をし給人は

(68ウ)

よくもなきと源のつくり事にの給也

仁明四十御賀冊一崩 天曆冊二崩東三条冊崩

右大將定国延喜六年行四十賀同年七

花昭宣公貞観十七年四十賀五十七歳

貞信公延喜十九年四十賀七十歳

かゝる例もあれば多分に付てためしすくなきとは

かける也

のへて五十賀をし給へかしと源詞也

宮のおはしますまのしん殿に 六条院内ひ

つしさるのまち妹好方也

かந்தちめのろくなと大饗になすらへてみこたち

にはことに女のさうそく非参議の四位まうち君

たちなとたゝの殿上人にはしろきほそなか

問云河海抄ニ大饗とは中宮の饗になすらへ

られたる歟云々中宮春宮ニ宮大饗はいかやう

の時おこなはるゝ事にか

一答中宮春宮の大饗は二宮の大饗といひて

毎年正月二日ニ大内の北の玄輝門の東の腋

にて東宮の饗あり

同門の西にて中宮の饗あり其事を河海

にひかれたる也河ニくはし

こしさし 絹なり

名たかきおひ 高名録云 韓狩<sup>マツ</sup> 落花形等也

孟津抄ニアリ

孟津抄ニアリ

(69ウ)

(69オ)

ふるきよの一事のこと 天下第一名物也故先坊より  
此御物は皆参也

むかし物かたりにも物えさせたる 紫式部か詞也

孝經史記ノ語注孟津抄

<sup>願給</sup>花七大寺四十寺などへ御誦經徳錢を施入せられ

<sup>御字ニ</sup>又延長四年六条院御賀ニハ朱雀の獄にて

ハシマル賑給の事あり今これらの事を思て物語

にいへり河説不用之云々

<sup>季春</sup>月ニ天子倉粟ヲヒラキテ貧窮ノ物ニ給也

<sup>禮記</sup>ノ月令ニモ侍ニヤ

こちたき御なからひのこと、もはえそかそへ

あへ侍らぬや えか、ぬと式部か詞也

うちにはおほしそめてしこと、もをむけにやは

とて中納言にそつけさせ給てける

行幸などの事源の辞し給しによて

夕霧に仰つけられける也

そのころの右大将 系図になし河説不載之

この中納言に御賀の程よろこひくはへんと

おほしてにはかになさせ

其比の右大将闕に依て源の賀に猶よろこ

ひくはへ給はんとて夕霧に任大将事被仰也

うしとらのまちに御しつらひまうけ給て

此御賀は夕霧大将花ちる里のすみ給へる

うしとらのまちのしん殿にてとり行はれたる也

(70オ)

所／＼のきやうなともくらつかさこくさう院より  
つかうまつらせ給へり

内裏よりおこなはるゝ御賀にはかならずくら

れう穀倉院なとより饗<sup>屯</sup>としきの事

をはさたをいたす也則藏人頭宣旨を書

くたす定たる事也

頭中将せんしうけ給て 新儀式云藏人頭奉

仰先書出可造仕御調度等略之

左右のおとゝ大納言二人中納言三人宰相五人

寛平遺誠

公卿正員太政大臣左右大臣各一人大納言二人

中納言三人参議八人合十六人

殿上人はれいの内春宮院のこりすくなし

花殿上人は禁中にかきらす院の殿上人春宮

の殿上人なとして其所／＼にゆるされて

昇殿する事ありをのつから其中にかね

たる事も有へし院にて昇殿したりとも

内裏にていまた昇殿せすは殿上の役に

随はぬ事也

おほせ事ありて 相国は聊尔ニ無出仕物也

雖然仰事別而の事なれは参給也けふ

おほせ事ありてとは賀を給ふにつきて也

院もいとかしこくおとろき申給て御さにつき給

源のかたしけなきとて驚給ふ

(70ウ)

(71ウ)

(72オ)

(71オ)

しうとくとはみえ給へる 致仕の跡 宿徳也  
御屏風四帖にうちの御てか、せ給へるからのあや  
のうすたんにしたゑのさまなど

河延喜七三廿八日大后御記曰おと、の御賀を  
實頼中将つかうまつれり四尺の屏風二  
よろひ御てをうへにか、せ奉らせ給取要書之  
拾遺集右大將定国四十の賀に内より屏  
風調して給ひけると云々

弄主上の宸筆の御繪也問書云歌歌餘歌私不定  
をき物のみつしひき物ふき物など

子也引物吹物とは楽器等の事也  
河清涼殿ニ立ニ御厨子ニ置様孝道記拍子<sup>ヒテ</sup>箏<sup>カサ</sup>  
築大笛北第一階<sup>カサ</sup>無置物<sup>カサ</sup>第二階<sup>カサ</sup>右笙箱<sup>カサ</sup>  
左琵琶<sup>カサ</sup>玄上<sup>カサ</sup>笙<sup>カサ</sup>横笛<sup>カサ</sup>第三階<sup>カサ</sup>等<sup>カサ</sup>第四<sup>カサ</sup>  
階<sup>カサ</sup>和琴<sup>カサ</sup>拍子<sup>カサ</sup>云々打物をは南に  
をくへしまつ鞆鼓<sup>カサ</sup>次<sup>カサ</sup>太鼓<sup>カサ</sup>次<sup>カサ</sup>征鼓<sup>カサ</sup>

御馬四十疋左右のむまつかさ六衛府の官人  
六衛府とは左右近衛府左右衛門府左右  
兵衛府也これを左右馬つかさ六衛府とは  
いふ也以上六人なるへしみかとより六条院へ  
まいる御馬也

河延喜十六年三月七日御賀御記曰左右少將<sup>カサ</sup>  
諸衛佐馬寮<sup>カサ</sup>助等引御馬十疋奉覽<sup>カサ</sup>云々

(72ウ)

(73オ)

花延長二年正月廿五日自<sup>カサ</sup>宇多院<sup>カサ</sup>被奉<sup>カサ</sup>ニ若菜<sup>カサ</sup>  
於<sup>カサ</sup>内裏<sup>カサ</sup>ニ院引出物御馬四十疋入<sup>カサ</sup>ニ日花門<sup>カサ</sup>ニ驢<sup>カサ</sup>ニ

藏人大夫<sup>カサ</sup>退出<sup>カサ</sup>近衛騎之次召<sup>カサ</sup>ニ馬寮<sup>カサ</sup>給之内  
堅奉上左馬頭等大臣立左牧面頭西面作  
之今案延長の御賀の御馬四十疋は院よ

りまいらせらるゝによりて院の御まやとねり  
これを引て内裏にては近衛にわたすを  
御覽ありて馬寮の官人をめしてこれを

たまふこの物かたりの御馬は内裏よりひかせ  
らるゝによりて左右の馬つかさ六府の官人  
なと是をひく延喜十六年三月の法皇の

御賀に御馬十疋内裏よりひかせらるゝ時  
此定也時にしたかひことによりてかはる事  
なるへし

弄問云御馬を引は六条院へ内よりたまはり  
給成か六衛府をは六衛府とよむか答花  
鳥にのせ侍り云々

れいの萬歳<sup>カサ</sup>樂<sup>カサ</sup>賀<sup>カサ</sup>皇恩<sup>カサ</sup>などいふまひ

河延喜六年并ニ同十六年御賀共賀皇恩  
万歳樂あるよし御記にみえたり云々

花此外舞とも猶あるへけれとめてたきがく  
あるによりて此二をいへりいづれも御賀  
にたよりある舞也たし御あそひをいそか  
るゝによて舞はけしきはかりのよしみえたり云々

(73ウ)

(74オ)

(74ウ)

おと、和琴ひき給 太政大臣の年経給へる  
ゆへにや一段なを面白とて源氏も御琴  
のひきよくもののこし給はぬと也

御をくり物にすぐれたるわごん一このみ給ふこま  
ふえそへてしたんのはこ一よろひにからのほん  
ともこゝのさうの本など

六条院よりも太政大臣に御引出物也

からの本とは唐の手本也こゝのさうの本  
かなの手本也

河太后日記承平四年十二月九日おと、とく

まうて給ぬ御送物沈の箱一よろひいれたり

先代の御ての万葉集いまひとつには本五  
巻やまと琴一ニハ猶例とも有也略する也

花承平四年三月九日奉ニ仕中宮御賀一貞

信公不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>禄<sub>ニ</sub>退出<sub>ニ</sub>給<sub>ニ</sub>禄并<sub>ニ</sub>手跡<sub>ヲ</sub>和琴  
等本万葉集入宮二合 今案延長二年

の御賀の御引出物は中宮より内裏へまい  
らせられたる色目を李邵王記<sub>ニ</sub>に<sub>ハ</sub>しるされ

たり今の物語は致仕の太政大臣に六条院  
よりの引出物也延長の例にはおなしから

さるへし承平四年の中宮の御賀は貞

信公<sub>于</sub>時<sub>攝政</sub>是<sub>ヲ</sub>を<sub>シ</sub>て<sub>ハ</sub>る<sub>ヲ</sub>攝政は人々<sub>ヲ</sub>禄<sub>ヲ</sub>を  
給はる<sub>ニ</sub>さきに<sub>ハ</sub>早出<sub>アリ</sub>し<sub>ハ</sub>は<sub>ハ</sub>追<sub>ハ</sub>中宮

より禄と引出物<sub>ヲ</sub>和琴万葉集の本<sub>ナ</sub>

(75オ)

とを給はり給その子細は太后の御日記に  
もみえたり此例今の物語にはいさ、かによ  
りたりといふへきにやと云々

御馬ともむかへとりて右のつかさともこまの  
楽しての、しる

弄問御馬をむかへとるは禄にたまはるにや右の  
つかさ高麗の楽してとは右の楽人の事か

一勘むかへとるとは内よりひかれたる御馬をう  
けとる事也

内春宮一院 一院は朱雀院也いづれも源を  
はなれ給はぬ御中也

かの母北のかたのいせの宮す所との恨ふかくい  
どみかはし給けんほと御すくせとも行ゑ

みえたるなん 葵上とみやす所と車あら  
そひの恨ふかくあらそひ給ゆくゑの御子達

の中にも秋好の中宮よりは夕霧はたゞ  
人なれはをとりさまの心也

弄秋好夕霧等さいわゐあり彼母達のいとみ  
のゆくゑなしと也

こなたにはよその事に聞給ふ

花花ちる里也ゆふきを子のことくし給へる  
によりてけふの事は数にいり給と云々折節

の御いとなみことをも花ちる里はし給はて  
よその事に聞給ひしをかゝる物々しき

(76ウ)

(76オ)

(77オ)

かすにましらひ給は夕きりを御養子にし給ゆへ也

としかへりぬ 源四十一才也

おとゝの君ゆゝしき事を見給へてしかは

いま／＼しきと也葵上のゆふきりのむまれ給ひし時うせ給ひし事

たいのうへなとのさることし給はぬは

むらさきの上の御産<sup>サ</sup>なとし給はぬはさう／＼しく口惜けれども但心つかひをし給はぬは

心やすきとの源の心也

またいとあへかなる御程に 明石姫君十四さいか

所をかへて

河<sup>カ</sup>栄<sup>エイ</sup>花<sup>カ</sup>物<sup>モノ</sup>語<sup>ゴ</sup>上<sup>ジョウ</sup>東<sup>トウ</sup>門<sup>モン</sup>院<sup>イン</sup>おなしやうなれは所を

かへさせ給とあり

あかしの御まちの あかしの上のすみ給ふ

町也

弄<sup>ロウ</sup>北<sup>キョク</sup>のたい也

みすはうのたんひまなくぬりて 護<sup>ゴ</sup>摩<sup>マ</sup>の

壇也

母君 明石上也

大あま君 明石上の母也

此御ありさまをみたてまつるは 三歳以後はしめて姫君を見奉る也

かゝる人ありとは 尼君の事を姫君のは

(78才)

のかに聞をよひ給しと也

けにあはれなりける 姫君の御心の中也

人をは又なき物に 禁中にてもひめ君

はずいぶんと心おこりし給けるををし<sup>けた</sup>

れ給ひし世上の人達はさこそおかしく

思ひつらんと姫君の心也

さる世はなれたるさかひにて 明石の浦にて

生れ給ひしことをは姫君はしり給はさりし

との心也

いとあまりおほとき給へるけにこそ

草子地也

仙人<sup>センジン</sup>の世にもすまぬやうにて おもひみた

れ給姫君の心也

御かたまいいり給て 明石上也

あなみくるし 明石上詞也

くすしなとやうのさましていとさかりすぎ

給へりやなと 醫<sup>イ</sup>者<sup>シャ</sup>なとこそかやうにして

はさふらへと也

よしめきそんしてふるまふとは 年よりた

れとよしめきすくしたる也そしてとは殺

の字也河海説いかゝ

かはらかに さはやかにといふ詞也

こたいのひがごとゝも 明石上の詞

きつらんはや

(77ウ)

(79才)

(78ウ)

弄は文字にこるへし  
おほしみたるゝにや 姫君へ尼君の色々  
のこをかたり給ふゆへにかやうにしつまり

(79ウ)

給ひておほしみたるゝかと也

今はかはかりと御位をきはめ給はん世に  
明石上の心にはひめ君の后にも立給ての  
ちに昔語をも申さんと思しと也さりな  
から尼君のかたり給とてもおほしはすつ  
ましけれともと也

心おとりし給はんとおほゆ 姫君のむかし

かたりをきゝ給ひて此ほとよりは心を  
とりし給はんと思ふと也

まかてぬるに 加持カザの僧達ソウダツ退出ダイシュツ也せめて

これほとなりともきこしめせと母君の申

給へとも御参りなければ心くるしきと也  
あなかたはらいたと 明石上のあま君にめく

はせすれとも尼君は聞いれすとも又そこに  
ある人達も思ふ所を明石上のしんしやくあ

れとの心也

○老の波かひある浦に立出て塩たるゝあまを誰かとか

心は明也かひあるうらとはこゝのめてたき

所にあるをはたれ人のとかめんそと也尼

君の哥也

むかしの世にも

(80ウ)

河幡ハシ々国老コクヲウ乃父兄ノフイセイ 文選モンセン 年よりたるは  
めてたき物とてかやうなる所へもゆるさるゝ  
物そと也

○しほたるゝあまをなみちのしるへにてたつねも見はやほまのときま

姫君御哥 くはしきことはけふ此尼君の申

給にはしめてしり給へる也

○世をすてゝあかしのうらにすむひとにこゝろのやみははるけしも  
入道の事也あかしは明アカシなるかたによりめり心は

(81オ)

明なるかたにあるへしされと子を思ふみち  
ははれかたかるへし

わかれけん暁のことも夢のうちに

花是は明石上の入道にわかれし暁の事いつと

なく取乱てうちわするゝやうなるを我なから

情なしと思へるといへり

弄中宮のしらせ給はぬをいへり夢のうちに

とはゆめにおほえ給はさると也

おとこみにさへおはすれば 此みこ後の春

宮也

(81ウ)

こなたはかくれのかたにて

弄明石上のかたにかりにわたり給し也

しろき御さうそくし給ひて 紫上のさま也

産所へしろき装束シヤウゾクを上下シヤウゲきる物と也九日

めにつねの色をきると也

河御産当日 上下サン着キル二白装束シヤウゾク 一夜 改二白装

東<sup>マ</sup>復<sup>フ</sup>尋<sup>ス</sup>常<sup>ツ</sup>也九<sup>イ</sup>条<sup>ク</sup>右<sup>サ</sup>丞<sup>シ</sup>相<sup>ソ</sup>記<sup>キ</sup>云<sup>ク</sup>女<sup>メ</sup>房<sup>ボウ</sup>等<sup>ト</sup>  
各<sup>ソノ</sup>着<sup>キ</sup>ニ<sup>ニ</sup>白<sup>ハク</sup>裳<sup>ショウ</sup>唐<sup>タウ</sup>衣<sup>イ</sup> 冷<sup>レイ</sup>泉<sup>セン</sup>院<sup>イン</sup>降<sup>カウ</sup>誕<sup>タン</sup>

まことのをば君は 明石上は真実のうば君

なれとも紫上にまかせ給ひて御ゆとの、

あつかひをし給ふと也をばうば同事といへり

春宮のせんしなる内侍のすけ

弄間云内侍のすけなる人の宣旨とかうする人歟

一勘宣旨は宣旨殿とて今も女ばうの名

にもいふ也是はないしのすけをかねたる也

女の官也宣旨と内侍と兼官したる人

也御湯にまいる人なるへし

御むかへゆにおりたち給へる うぶゆにまいり

給也誕生の御子のまへに先湯におる、

をいへり

うちくゝの事も 明石姫君の母といひても

口惜からざると也

このほとのきしき 草子地也

六日といふにれいのおとゝにわたり給ぬ

花寝殿へわたり給事也紫上の御かたへ

ひめ君の御出と也

七日の夜内より御うぶやしなひ 御子誕生の

時は父御門よりうぶやしなひの事例多之

朱雀院村上の時も延喜のみかとよりあり

しと也今も朱雀院の御うぶやしなひ

(82ウ)

(82オ)

あるへき事なれとも御出家の事なれば御

かはりに冷泉院のみかとよりさせ給と也

花延長元年七月廿日朱雀院御誕生七日

御うぶやしなひ内裏よりせらる同四年六

月一日村上院御誕生七日の御うぶやしなひ

も内裏よりせらるこれらの例也御前の

物は榎の木の小臺磐六前に銀の笥

頭盤やうの物をすゆる也うちき并絹

綿布基手の銭五十貫或は世貫に

いろくゝあり参入の人々には女の装束

人によりてこれを給それに御うぶきぬ

重むつき一重なとそへて給事也云々

弄延長元承平御門御誕生の時父みかと

より御うぶやしなひありし也天慶の御

時もありき今は内より朱雀院の御かはり

にさせ給ひし也問云藏人所より如何一勘

頭弁の宣旨をうけたまはるは藏人かたへ

おほすること也勿論の儀也祿はたれ人

に給祿之哉云々

頭弁 たれともなし

おはやけ事には 中宮よりし給へるゆへに

何事もきらをつくしたり公儀はかきりあ

れはさもなき物也

みやひ 風流なる事をいへり風姿草子

(84オ)

(83ウ)



地也

いまゝて見せぬか ゆふきりの御子あまた

あれとも源へいまたみせ申されぬを恨

給心也

さるへきかたにはひけして 卑下すへき

ほとのことをはひげする也

にくらかにも あかしの上をほめたり

見えかはし給て 紫上と明石上とそと

たいめんありし也紫上のゆたなく思給ふ

人なれと姫君ゆへにいまはとうかなくおほ

しめすと也

宮の御とく 心のへたても今はなき也

あまかつなと はうこの事つくりそゝくり

とはてまさくりにし給ふさま也

彼あかしにもかゝる事 入道も姫君の御

はゝに御子の生れ給ことをきゝつたふると也

たゝすこしのおほつかなき事 姫君の御や

うだいを聞たく思ひしもはや聞たるとの

心也

おもひはなるゝ 明石上へ入道の方よりもわさ

と文をまいらせらるゝ也

この年比は

弄入道の詞 是より文の詞

たゝ御ことを 明石上の事をいへり

(84ウ)

わかおもと あかしの上也是も文の詞也

その夜の夢にみしやうみつからすみの山を右の

手にさゝけたり

花今案内典外典に夢をとける事おほし

といへとも今の物語にいへるは善恵仙人の

五種の奇夢をとけるにすこしきもたかふ

所なし但其心はかはる事あるへし先須弥

といふは梵語には蘇迷盧山唐には妙高山

といふ四寶をもてつくれるにや妙といふ

地に入事八万由旬地を出る事八万由旬合

て十六万由旬の山なるにや高とは名つ

くる也東西南北に四別あり日月は山の半

腹をめくりて昼夜をてらすといへり

明石入道の夢は明石上の生れんとする夜

の夢といへりしはらく是をあはせていはゝ

須弥の山は山にきては上なき山也右のて

にさゝくるといふは女をは右につかさとは明

石上をいふへし山の左右より月日のさし

出たるは月の中宮日は東宮にたとふれば明

石上の御女中宮に立て孫に春宮をうみ

給へき瑞也みつからは山の下にかくれて其光

にあたらぬといふは明石入道世をのかれて榮

をむさほる心なければかの御徳をはみさるを

光にあたらぬとはいへり山をはひろき海に

(85ウ)

(86オ)

(86ウ)

うかへをくとは東宮つゐに御位につき給て  
四海をたなごゝろにきり給ふへき心也  
我身はちいさき舟にのりて西をさして  
ゆくとは入道般若の舟に棹さして生死の  
海をわたり西方極楽の岸にいたるへき  
にたとふ現当二世の願望成就してめて  
たき瑞夢也善惠仙人の夢に須弥日月  
をみ給へる事をは普光佛一とに是を

(87才)

あはせ給へり頗其心相違せりといへども  
各そのねかひもとむる所の成就せることは  
出世の利益ことなりといへともなすらへて  
是を思ふへき也又支契三藏は渡天の前  
に須弥の海中にある夢に見給ふと慈  
恩傳にあり又夢に日月をのむとみるはかな  
らす貴子をうむともいへり夢は無明薰習  
のなす所といへ共仏もおほく夢をもてた  
とへとして法を説給へり故に此次の詞にも  
内教の心をたつめる中にも夢を信すへき  
おほく侍といへりしらす物語の作者も善惠  
の五種の夢をふくみてかけるにや侍らんいま  
此物かたりの諸抄にひきのせさることおほつ  
かなしと云々

(87ウ)

一執日五者夢手執月唯願世尊為我解  
說普光答言夢臥海者汝在二生死大海其  
中一夢枕二須弥一者出二生死一夢下諸衆生入中身  
内上者為彼作二扇依処一夢執日者智光普照  
夢執月者清涼度生令離二煩惱此夢因縁  
是汝將來成佛之相善惠聞已不勝三踊躍  
私云此經說畧レ始者也

(88才)

過現同異經五種奇夢一者夢臥大海二者夢  
マクニストシメシ  
枕ニ須弥一三者夢下諸衆生入中我身内上四者夢二手

弄過去因果經善惠仙人之事夢を佛の  
あはせ給し事あり又須弥山王道にたとふ右  
の手は女によれりあかしの上月日は孫の中宮  
曾孫の春宮をいへり山をはひろき海にう  
かへとは春宮の四海をたもち給へき也小舟は  
般若の舟にて彼岸に至へき也俗云夢中  
不可勝計云々すみの山は須弥也花鳥に  
過去因果經をひけり妙也王道のひろき  
心也右の手には明石上をまうけたる也女な  
れは右也月日のひかりとは月は明石の姫君  
日は今の若宮也みつからは山の下とは入道は世  
に執心なきゆへに恩光にあたらさる也山をは  
ひろき海にとは四海をたなごゝろにいれ給也  
ちいさき舟にとは般若の舟に棹さして  
彼岸にいたるへき也花鳥儀尤可然  
河周礼六夢中有二正夢無風雨之夜無憂喜  
醉之時分明為二正夢猶未略之

(88ウ)

(89才)

ないけう 内教也

本行集経云摩耶夫人白象右脇へ入と夢

に見給淨飯王占夢婆羅門をめして

とはなしかは若母人夢見ミ 白象入ニ右脇彼母所

生子三界無極尊云々 浄土祖師善導和尚

観経 疏にも以夢説定せり

いたつき いたはる心也又かしつく心もあり

この国の事にしつみ 近衛中将をすて、播磨

守になりぬる事也

わかきみを あかしの上の果報をたのみし

わかきみ国のはゝとなり給ひて 是はひめき

みの御事也国母となり給ふへきと也

此ひとつのおもひ 現在の因を見て未

来の里をしるへき也

はるかに西のかた十万おくの国へたてたる

河 阿弥陀経は西方過二十万億佛土有二世

界一名為三極樂

水草清き山のすゑにて さがのみかどの

御時玄賓を僧都になし給處にさらに其

望なきとて官牒を樹にさしはさみて深山

に入てよめり

引哥ゝとつ国は水草清きことしけき都のうちはすますまざれり

此哥の心にてかけり

○光へてん曉ちかく成にけりいまそみしよの夢かたりする

(90オ)

入道哥 心は春宮の天下を掌にたもち

給へき光のちかつくとの心也又下の心は入道

か闇よりもそのあかつきに明いたらん事の

ちかき心かねてよめりみし夜の夢かた

りをするに御代のいよゝちかく覺ると也

弄春宮世をたもち給ふへき也又は入道闇より

明にをむくへき心ともいへり

月日かきたり 惣別女房の文には月日は

かゝぬ物なれとも入道かたえたるみねに入をめ

い日にし給へといふ心にわざと月日をかける

なるべし

いにしへより人のそめをきけん藤の衣にも何

かやつれ給へきわか身はへんくゑの物とおほし

なして

花明石入道は棄恩入無為の心にて父子恩愛

の道をたゝんためいにしへより人のそめをける

藤の衣にもやつるましきよしを遺言し侍れと

積尊猶淨飯王の金棺をかき給ひ目蓮又

母のため盂蘭盆をまうけ侍ればあかしの上

のわか身にあたりてはいかてか其恩を報ぜん

ことを思はさらんや但我をは変化の物と思ひ

なせといへるを河海に四生の中の化生をいふ

へきかとしるされたれと人界は劫初の時こそ

化生なとはありとみえたれ今の変化といふ

(91オ)

(90ウ)

は佛<sup>ブツ</sup>の願<sup>ガン</sup>力<sup>リキ</sup>或<sup>モ</sup>は定<sup>テイ</sup>力<sup>リキ</sup>によりて善<sup>ゼン</sup>惡<sup>アク</sup>の業<sup>ゴフ</sup>を

感<sup>カン</sup>してかりに其<sup>ソノ</sup>かたちを現<sup>ゲン</sup>する事<sup>コト</sup>あり

變<sup>ヘン</sup>易<sup>イ</sup>生<sup>セイ</sup>死<sup>シ</sup>とは是<sup>コノ</sup>をいふ也<sup>ナリ</sup>布<sup>フ</sup>袋<sup>タイ</sup>和尚<sup>ショウ</sup>は弥<sup>ミ</sup>

勒<sup>リキ</sup>の變<sup>ヘン</sup>化<sup>カ</sup>寒<sup>カン</sup>山<sup>サン</sup>拾<sup>シツ</sup>得<sup>トク</sup>は文<sup>モン</sup>殊<sup>ジュ</sup>普<sup>フ</sup>賢<sup>ゼン</sup>といふか

ことし明<sup>メイ</sup>石<sup>シツ</sup>入<sup>ニツ</sup>道<sup>ダウ</sup>の變<sup>ヘン</sup>化<sup>カ</sup>の物<sup>モノ</sup>といへるかやう

にみなしてしかるへきやらんしらすかし

明<sup>メイ</sup>石<sup>シツ</sup>上<sup>ジョウ</sup>に入<sup>ニツ</sup>道<sup>ダウ</sup>いのちをはるとも服<sup>フク</sup>衣<sup>イ</sup>をは

めすへからすと也<sup>ナリ</sup>古<sup>コ</sup>よりのならひにてはあれ

とも無<sup>ム</sup>益<sup>イキ</sup>との義<sup>ギ</sup>也<sup>ナリ</sup>

ねかひはへる處<sup>トコロ</sup>に安<sup>アン</sup>養<sup>ヤウ</sup>國<sup>コク</sup>也<sup>ナリ</sup>

さはの外のきしにいたりて

花<sup>カ</sup>善<sup>ゼン</sup>導<sup>ドウ</sup>大<sup>ダイ</sup>師<sup>シ</sup>の讚<sup>サン</sup>に誓<sup>チカエ</sup>到<sup>ニツ</sup>三<sup>サン</sup>弥<sup>ミ</sup>陀<sup>タ</sup>安<sup>アン</sup>養<sup>ヤウ</sup>界<sup>カイ</sup>還<sup>エン</sup>來<sup>ライ</sup>ニ

穢<sup>タイ</sup>國<sup>コク</sup>ニ度<sup>タク</sup>ニ人<sup>ニン</sup>天<sup>テン</sup>の心<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup>

彼<sup>カ</sup>やしろ 住<sup>ジュ</sup>吉<sup>キチ</sup>の杜<sup>ソ</sup>をいへり

ちんのはこにふしこめて 河<sup>カ</sup>封<sup>フ</sup>籠<sup>リョウ</sup>

かひなき身<sup>ミ</sup>をは熊<sup>クマ</sup>おほかみにませし

河<sup>カ</sup>薩<sup>サク</sup>埤<sup>ペイ</sup>王<sup>ワウ</sup>子<sup>シ</sup>飢<sup>キ</sup>虎<sup>コ</sup>に身<sup>ミ</sup>を施<sup>セ</sup>し給<sup>キヨ</sup>ふ心<sup>シン</sup>歟<sup>ナリ</sup>

熊<sup>クマ</sup>狼<sup>ロウ</sup>施<sup>セ</sup> 拾<sup>シツ</sup>遺<sup>イ</sup> 身<sup>ミ</sup>を捨<sup>スツ</sup>て山<sup>サン</sup>に入<sup>ニツ</sup>に我<sup>ガ</sup>なれば熊<sup>クマ</sup>のくらはんことも思<sup>オモ</sup>はず

あきらかなる所<sup>トコロ</sup>にて 花<sup>カ</sup>あきらかなる所<sup>トコロ</sup>は淨<sup>ジヤウ</sup>土<sup>ド</sup>也<sup>ナリ</sup>

このふみかき給<sup>キヨ</sup>ひて 弄<sup>ロウ</sup>つかひの大<sup>ダイ</sup>德<sup>トク</sup>詞<sup>ジ</sup>也<sup>ナリ</sup>

たえたるみねになん 弄<sup>ロウ</sup>深山<sup>シヤン</sup>なるへし絶<sup>ケツ</sup> 峯<sup>ホウ</sup>也<sup>ナリ</sup>

いまはと世<sup>ヨ</sup>をそむき給<sup>キヨ</sup>ひし のこりはへり

けりとかけるおもしろし一年<sup>イチネン</sup>のわかれのかな

(91ウ)

しさにつきたると思<sup>オモ</sup>ひしにたゝいま此<sup>ココ</sup>を

とつれをみ待<sup>マツ</sup>ておもへばなをかなしきの思<sup>オモ</sup>ひ

はかきりもなきものなりけりと也<sup>ナリ</sup>

佛<sup>ブツ</sup>にまかり申<sup>マウ</sup>て 辭<sup>マリ</sup>見<sup>ミ</sup>いとま申<sup>マウ</sup>也<sup>ナリ</sup>

そうふんし給<sup>キヨ</sup>ひて せうふわけするなど

といふ心<sup>シン</sup>也<sup>ナリ</sup>

仏<sup>ブツ</sup>の御<sup>ミ</sup>でしのさかしきひしりにたに驚<sup>オドロ</sup>の峯<sup>ホウ</sup>

をはたとくしからず資<sup>シ</sup>きこえなかなるをたきよ

つきけるよのまとひはふかゝりけり 佛<sup>ブツ</sup>は常<sup>ジョウ</sup>

在<sup>ザイ</sup>靈<sup>リヤウ</sup>鷲<sup>リウ</sup>山<sup>サン</sup>なるたにも弟<sup>テイ</sup>子<sup>シ</sup>ともはかなしし侍<sup>シ</sup>

に此<sup>ココ</sup>尼<sup>ニ</sup>君<sup>キミ</sup>のなけきことはり也<sup>ナリ</sup>となり

佛<sup>ブツ</sup>の御<sup>ミ</sup>でしとは三<sup>サン</sup>明<sup>メイ</sup>六<sup>ロク</sup>通<sup>ツウ</sup>の大<sup>ダイ</sup>羅<sup>ラ</sup>漢<sup>カン</sup>等<sup>トウ</sup>の中<sup>ナカ</sup>

にも迦<sup>カ</sup>葉<sup>ヤフ</sup>目<sup>モク</sup>蓮<sup>レン</sup>阿<sup>ア</sup>難<sup>ナン</sup>舍<sup>シャ</sup>利<sup>リ</sup>弗<sup>フ</sup>等<sup>トウ</sup>とは佛<sup>ブツ</sup>は

涅槃<sup>ネパナ</sup>に入<sup>ニツ</sup>給<sup>キヨ</sup>へとも現<sup>ゲン</sup>有<sup>ユウ</sup>滅<sup>メツ</sup>不<sup>フ</sup>滅<sup>メツ</sup>の理<sup>リ</sup>又<sup>マタ</sup>常<sup>ジョウ</sup>

在<sup>ザイ</sup>靈<sup>リヤウ</sup>鷲<sup>リウ</sup>山<sup>サン</sup>の心<sup>シン</sup>をはよく分<sup>ブン</sup>別<sup>ベツ</sup>し給<sup>キヨ</sup>へとも

佛<sup>ブツ</sup>此<sup>ココ</sup>夜<sup>ヤ</sup>滅<sup>メツ</sup>度<sup>タク</sup>如<sup>ニツ</sup>三<sup>サン</sup>新<sup>シン</sup>尽<sup>ジン</sup>火<sup>カ</sup>滅<sup>メツ</sup>の時<sup>トキ</sup>は吾<sup>ガ</sup>心<sup>シン</sup>ま

とひし給<sup>キヨ</sup>なればまして尼<sup>ニ</sup>君<sup>キミ</sup>の歎<sup>ソ</sup>勿<sup>ブツ</sup>論<sup>ロン</sup>の

事<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>

忍<sup>ニン</sup>ひてわたりたまへり

弄<sup>ロウ</sup>あかしの上<sup>ジョウ</sup>北<sup>ホク</sup>のたいへかへり給<sup>キヨ</sup>也<sup>ナリ</sup>

おほろけなうては

弄<sup>ロウ</sup>おほろけならぬことなうてはの心<sup>シン</sup>にや如<sup>ニツ</sup>此<sup>ココ</sup>詞<sup>ジ</sup>を

つかふ事<sup>コト</sup>おほしおほろけのいのちなかさな

めりとあるもおほろけならぬ事<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>いひのこし

(92オ)

佛<sup>ブツ</sup>の御<sup>ミ</sup>でしとは三<sup>サン</sup>明<sup>メイ</sup>六<sup>ロク</sup>通<sup>ツウ</sup>の大<sup>ダイ</sup>羅<sup>ラ</sup>漢<sup>カン</sup>等<sup>トウ</sup>の中<sup>ナカ</sup>

にも迦<sup>カ</sup>葉<sup>ヤフ</sup>目<sup>モク</sup>蓮<sup>レン</sup>阿<sup>ア</sup>難<sup>ナン</sup>舍<sup>シャ</sup>利<sup>リ</sup>弗<sup>フ</sup>等<sup>トウ</sup>とは佛<sup>ブツ</sup>は

涅槃<sup>ネパナ</sup>に入<sup>ニツ</sup>給<sup>キヨ</sup>へとも現<sup>ゲン</sup>有<sup>ユウ</sup>滅<sup>メツ</sup>不<sup>フ</sup>滅<sup>メツ</sup>の理<sup>リ</sup>又<sup>マタ</sup>常<sup>ジョウ</sup>

在<sup>ザイ</sup>靈<sup>リヤウ</sup>鷲<sup>リウ</sup>山<sup>サン</sup>の心<sup>シン</sup>をはよく分<sup>ブン</sup>別<sup>ベツ</sup>し給<sup>キヨ</sup>へとも

佛<sup>ブツ</sup>此<sup>ココ</sup>夜<sup>ヤ</sup>滅<sup>メツ</sup>度<sup>タク</sup>如<sup>ニツ</sup>三<sup>サン</sup>新<sup>シン</sup>尽<sup>ジン</sup>火<sup>カ</sup>滅<sup>メツ</sup>の時<sup>トキ</sup>は吾<sup>ガ</sup>心<sup>シン</sup>ま

とひし給<sup>キヨ</sup>なればまして尼<sup>ニ</sup>君<sup>キミ</sup>の歎<sup>ソ</sup>勿<sup>ブツ</sup>論<sup>ロン</sup>の

事<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>

忍<sup>ニン</sup>ひてわたりたまへり

弄<sup>ロウ</sup>あかしの上<sup>ジョウ</sup>北<sup>ホク</sup>のたいへかへり給<sup>キヨ</sup>也<sup>ナリ</sup>

おほろけなうては

弄<sup>ロウ</sup>おほろけならぬことなうてはの心<sup>シン</sup>にや如<sup>ニツ</sup>此<sup>ココ</sup>詞<sup>ジ</sup>を

つかふ事<sup>コト</sup>おほしおほろけのいのちなかさな

めりとあるもおほろけならぬ事<sup>コト</sup>也<sup>ナリ</sup>いひのこし

(93オ)

(93ウ)

たる詞なるへし おほろけならぬことならて  
はと也

さらはひが心にて 明石にて源に契をこめ  
し事は入道の心ひかみてし給にやと京へ

のほり給ひて中そらのやうにありし時は

思ひしとの心をわか身のさしもあるましき

ことにあくからし給といへり今此ゆめかたりを

きゝてさては其ゆへ入道心たかく思ひ給ける

よと思ひあはせ給ふと也

わか身もさしもあるましき 年月わか身を

あかめ給しは此ゆめのたのみなりけると此行

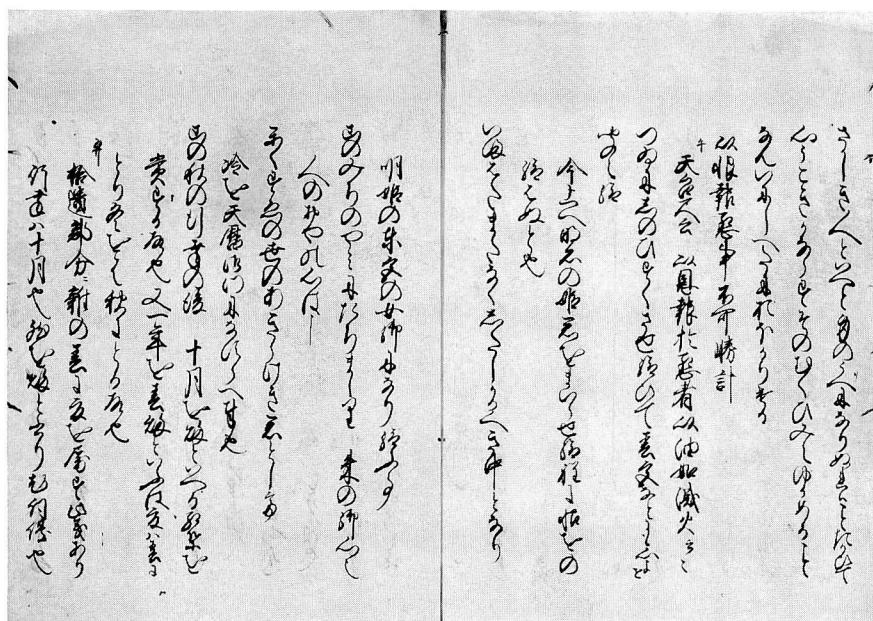
すゑもたのもしと也

君の御とくには 尼公の詞也明石上のとくに

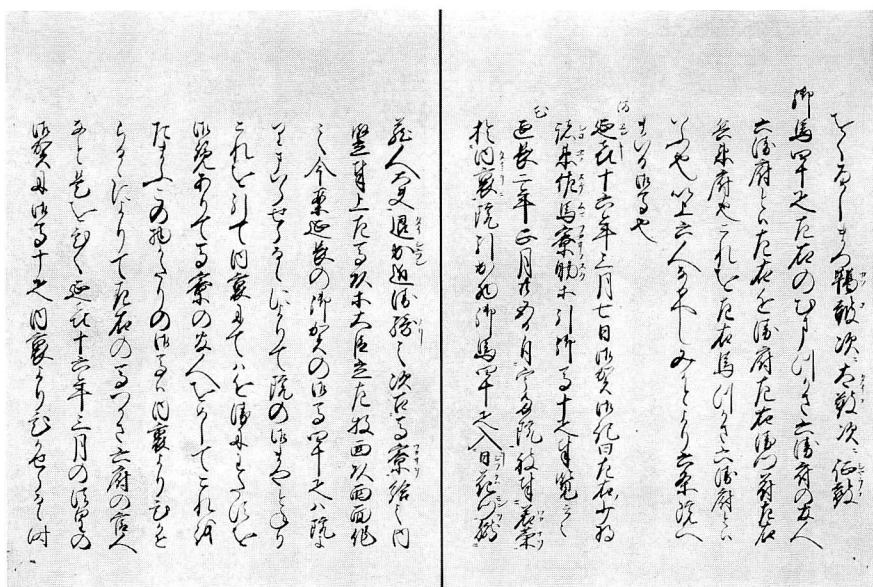
は身にあまるまで過分なることもあり

(94  
オ)

(94  
ウ)



口絵 1. 「孟津抄」若菜上 (5ウ〜6オ)



口絵 2. 同 (73ウ〜74オ)